著：スズム
主犯：150P
イラスト：さいね／こみね
詩欠落
-Re:code-
終焉ノ栞
MF文庫J

終焉ノ栞
シュウエンシオリ
詩欠落
-Re:code-

終シユウ焉エン ノ栞シオリ 詩シ

欠落ロスト-Re:code-

スズム

Contents

「夢と違う事をしたら、ダメだよね？」

消毒液の匂においが鼻をつく。

体中に繋つながれた線を通じて、液体が流れ込んで来る。

生きている？　生かされている？

真っ白な真っ白な世界。

空気が動く気配がすると、そこに甘い匂いが混じる。

今日もまた、あの声が聞こえる。

何を言っているのかは分からない。

けれど、ひどく、ひどく優しい声だった。

花を飾り、たわいもない話をすると、「またね」と言って出て行った。

そして、また、いつも通りの孤独。

定期的に聞こえる、電子音。

このまま、また深い昏睡へと導かれていくのだろう。

そう、思っていた。

しかし、今日は、またしても来客があった。

動かせない体は、瞼を開く事も出来ない。

意識も混濁しているが、それでもこれまでと違う雰囲気を感じた。

……４、５人だろうか？

まるで、あの時のみんなのようだ。

あの頃は、楽しかったな。

そうか、もしかすると、これももうすでに夢の中なのだろうか？

「彼は、その全てを良く知っている人物だ」

一人の少年が言った。

「……十年前の、被害者の一人？」

そしてもう一人の少年が続ける。

十年前？

被害者？

何を言っているんだ？

「──それどころか……──」

そうか、随分と時間が経たっていたんだな。

長かったボーナスステージは、ようやく終わりを迎むかえるらし

い。

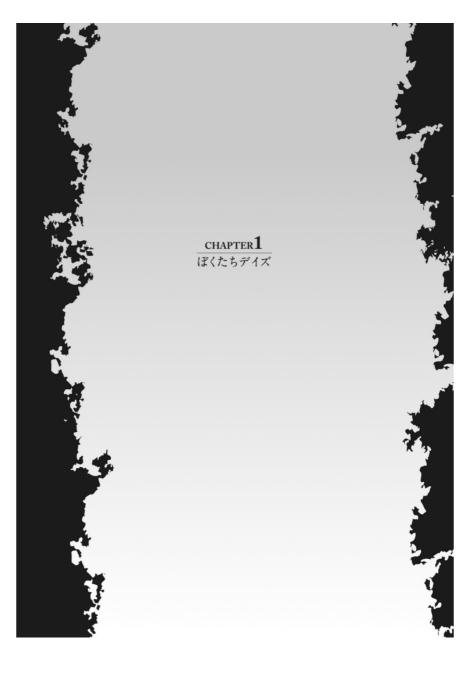
　モラトリアムの終わり。

　なら、結論はひとつしかない。

　明日にでも、いや、彼らが帰ったすぐにでも、その結論がやってくることだろう。

　それなら……。

せめて、最期に……。

CHAPTER 1
ぼくたちデイズ

ぼくたちデイズI　□はらぺこのバラッド−

「Ｅ記イーキ～！　昨日の映画良かったぞ～！」

「お！　ありがと！」

「Ｅ記、お前は出演しないのかよ～！」

「あはは、オレは監督兼プロデューサーだからな～」

　文化祭２日目。

　校舎の中は、前日よりもさらに賑にぎわっていた。

　オレはクラスメイト達たちから声を掛けられつつ、廊下を歩いている。

　オレが所属している、というよりも半ば強引に活動をしている「映画研究会」は昨日、文化祭の１日目で自作映画の上映会をした。

　結果は、大成功。

　第１回目の上映から盛況で、さらに、それを見たお客さんが「面白かった」と口コミで伝えてくれて、第２回第３回とどんどんと人が増えていった。

　最終回上映では、立ち見も出たほどだ。

　もちろん、お金が掛かってるわけじゃないから、照明とかだって

しっかりとはしてないし、音声とかも聞きづらい部分もある。

　カット割りだって、今考えるとこうすればよかったな！　なんて思ったりするところもあるし、クオリティの部分で言い出すとキリが無いほどダメだしは出来るだろう。

　でも、自分たちで今できる、最大限以上の物が出来たという自信はあった。

　全ての上映が終わった後、自分たちのためだけに最さい後ごの上映会を行った。

　終了後には各々、どこのシーンが良かった、どこのシーンの撮影の時はこうだったなどという話に花が咲く。

　一つ一つのシーン、全てに思い出があって、語り尽くせないほどだった。

　オレはそんな話をしながら、充足感と共に、少しの寂しさを感じていた。

　それはその場にいるみんなが感じていたことだろう。

　しかし、話は急に変な方向へと向かう。

「──……そういえばさ、Ａ乃エーノの話のあのシーン、なんかノイズ？　みたいなのが映ってなかった？」

「あ、それ私も思った！」

「おかしいんですよね。編集の時は無かったと思うんですが……」

「撮影後のチェックでも無かったと思うけどなぁ？」

「……な、なんだろう……ね？」

—まさか本当に霊的なものが映り込んだ？

いやいやまさか。

そんな話の流れから、オレは一つの提案をする。

「……じゃあ、撮り直してみる？」

みんなはしばらくの間黙っていたが、最終的な結論としては一つだと言うことになったらしく、表情を明るくして一斉に笑い出したのだった。

理由はなんでも良かったのだ。

オレたちは、まだ映画撮影を続けていたかった。

最初はただの気まぐれ、面白そうという気持ちだけでみんなを巻き込んだのだが、みんなと一緒に活動できて本当に良かった。

また、あの楽しい日々が戻ってくるんだ。

学校から帰った後のその不思議な高揚感は止やまず、昨日の夜は、余よ韻いんに浸りながら眠りについた。

そして、今日は文化祭の２日目である。

映画上映会は１日目だけのプログラムで、今日は映画研究会の面々は特にやるべきことは無かった。

オレは目的も持たずにフラフラと喧けん噪そうの中を歩く。

しかしそれだけでもワクワクするような気持ちになる。

上映会の準備で、昨日はまったく文化祭を楽しむことが出来なかった。

今日は思う存分に学園祭を楽しむのだ！

「あああーＥ記イーキー」

「あれ？　先生？」

　廊下の前方から、無ぶ精しょう髭ひげで、髪も整えていないのかボサボサなままの男性教諭が歩いてくる。

　彼は現在の映画研究会の顧こ問もんである。

　普段は適当で、まったくやる気のない先生なのだが、今回はいろいろとオレ達たちのためにがんばってくれた。

　今回の文化祭で一番株を上げた人物だろう。

「お疲れ様っす！　今日はどうしたんですか？」

「ん～……いや、学校の見回りに任命されちゃってさぁ……来月には宿直当番とかもあるし、ほんと、面倒くさいよな～」

「……いや、しっかりしてくださいよ……」

　なんだか足下がおぼつかず、フラフラしている先生。

「……酒でも飲んでるんです？」

「ばかやろう……、んなわけねえよ……」

「じゃあなんでそんなフラフラ……？」

「……体力不足だよ……」

「……ああ」

　なんかあんまり笑えないやつだった。

たしかにこの人が活発に動き回ってるイメージはないが、それにしても体力無さ過ぎだろうと思う。

「お前ら、上映会が終わったからってハメ外すんじゃないぞ～」

「ウィッス！　了解っす！」

「……そういえば、他のメンバーはどうした？」

「あー、いや、今日は特に予定決めてないんですけど、まあ、どっかでまた会うと思うんで！」

「んーそっか、まあ、せっかくだから楽しめよ、じゃあなー」

そう言ってフラフラと歩いて行く先生。

やっぱり足下がおぼつかず、どちらかというと先生が不審者っぽかった。

文化祭では、クラス毎ごとの出し物の他、各部活の出し物、そして有志によるステージ発表があった。

廊下には様々なクラスの出し物のポスターや、ステージの発表時間などが張り出されている。

張り紙によると、ステージではバンド演奏や演劇が予定されているようだった。

クラスの出し物は喫きつ茶さ店やお化け屋敷など、いわゆるベタなものが多い。

しかし各クラス毎にコンセプトが考えられていて、それを覗のぞいているだけでも楽しい。

また、外ではＰＴＡや地域の人間による屋台も開かれている。

食欲を刺激する匂においがそこかしこから漂ただよってくる。

歩きながらそういった匂いを嗅かいでいると、次し第だいにお腹なかが空すいてきた。

　お祭りとか、こういった時ってなんかやたらと美お味いしそうに見えるんだよな～とか、そんな事を思いながら、オレは校舎の外へと向かって行った。

　　　＊

　校舎を出てみると、かなり多くの屋台が軒のきを連ねていた。

　焼きそば、たこ焼き、焼き鳥や焼きイカ、焼きトウモロコシ、綿わた飴あめやリンゴ飴あめ、チョコバナナなどのような定番の食べ物系から、射的、おみくじ、飴細工作りなどの体験系まで様々な種類がある。

　屋台の食べ物というのはそれだけで、いつもよりも数倍美味しそうに見えるものだ。

　もういっそのこと全部のメニューを食べたい！　という夢のような事を思うが、胃袋は有限。吟ぎん味みするように全てのお店をひとつひとつ見て回る。

　屋台は校門から正面玄関を繋つなぐ道の両サイドに並んでいる。

　さらに、校門を入って右側の方にあるスペースでは、何やらイベントをやっているようだった。

　屋台をある程度見終わって、そのステージの前に行くと、そこに見覚えのある後ろ姿を見つけた。

「お！　Ｄ介デイースケ～！」

「ん～？」

　ゆっくりと振り返るＤ介。

　彼は、オレと同じ映画研究会の一人だ。

　映画制作の際は、カメラ撮影と、意外な演技力の高さを見せ活躍した。

　長い髪の毛を軽く後ろで縛るようなヘアスタイルだが、前髪はそれでも長く、目が見えないくらいだった。表情が見えないからか、いつもボーッとしているような印象が強い。

　いつものように、高い身長を猫ねこ背ぜで丸めている。

「なにしてんの？」

「ああ～これに出ようかな～って」

　そう言って指差したのは、ステージの横にある看板だった。

　そこに書かれていたのは……。

「……ふ、フードファイト？」

「うん～」

　屋台完全協力！　フードファイトバトル開催！　大食い戦士求む！

　フードファイト……つまり、大食い大会参加者を募集していた。

Ｅ記イーキは本気かな？　と思ってＤ介を見るが、相変わらず表情が読みとれなかった。

「……本気？」

「うん～Ｅ記も一緒に出ようよ？」

「え？　ま、マジかよ……！」

「あれ？　やだ？　だって屋台のご飯沢たく山さん食べられるよ？　お腹なか一いつ杯ぱいになったらリタイアすればいいし～」

　確かに、Ｄ介デイースケの言う事も一理あった。

　大食い大会は各屋台の宣伝も兼ねているようで、先ほど見てまわった数々の屋台が協賛として名前を連ねていた。

　正直あまり大食いには自信が無かったが、せっかくの文化祭だしな……！

「オッケー！　やろう！」

「りょうかい～」

　そう言いながら受付に向かう二人。

　ちょうど参加者の定員が上限だったようで、すぐ開始されるから待っているようにと言われた。

　数分ほど待つと、ステージの上に呼び出される。

　机の上には水、箸はし、そして紙エプロンが用意されている。

客席には、学校の生徒や地域の人たちが結構な数集まっていた。

「レディ――――――スエ―――――ンンジェントルマンッ!!」

「!?」

　突然の咆ほう哮こうに驚き、そちらの方を見ると、やたらと派手な格好をしたおっさんが、マイクを持ってしゃべっていた。

　し、司会者なのだろうか？　サングラスまで掛けている。

「お集まりの皆様お待たせいたしましたっ!!　屋台完全協力、フゥウウウウウウウウドバトォルゥウウウウファイッ！　ついに始まります!!」

　い、異様だ……。

　たかだか高校の大食い大会にしては、異様すぎるテンションだった。

　しかも周りの歓声もおかしい。待ってました！　やら、様々なかけ声が聞こえる。

　え？　これって、そんなに真剣なやつなの？

「それでは……！　地獄にチャレンジする選手……いや、バトラー達たちの紹介でぇっす！」

　地獄ってなんだ！　バトラーってなんだよ!!

心の中でツッコミをいれまくっているのだが、隣のＤ介デイースケは微動だにせずぼーっとしている。

「それでは、左手側から……！　エントリーナンバー１番！　商店街のジンベイザメこと、ジンベイザメまっちゃーん！」

「食らい尽くしたるでー！」

　商店街のジンベイザメ!?

　え!?　何その二つ名!?

　なんかやたらと体のでかいお相撲すもうさんみたいな人いるけど!?

「そして、フードバトラー界の女王！　プリンセス・ギャル盛！」

「マジよゆ～っ！」

　プ……プリンセス・ギャル盛!?

　うわ！　ギャルだよ！　ってかそんな細いのにフードバトラー界の女王なわけ!?

「そしてそして、すべての食材の味をタバスコで覆い尽くす、タバスコ戦法のセニョール森田～」

「センニョ―――――ル!!」

　タバスコ持ってるよ！

　え!?　全ての食事にタバスコかけるの!?

　な、なんのため!?

　ドＭなの!?

「今回はこの黄金メンバーに加え、主催学校から生徒さんが二名ほど参加してくださっておりまーす！」

「ははは、がんばれよ～」

「まあ、思い出出場だな！」

「二人タッグでもいいんじゃないか～」

　会場からは少し嘲ちよう笑しようするようなかけ声が飛んでくる。

　いやいやいやいや、たかだか学校の文化祭のステージにしては、ちょっとなんか、すごいっぽくない!?

　Ｄ介デイースケは相変わらずボーッとしてるけど、お、オレら完全に場違いでしょう！

　いろいろな料理食べられるしーって言ってたけど、よく考えたらそんなことないよね!?

　むしろ一種類をひたすら食べさせられるやつだよね！

「予選の料理はー！！！！！　これだ！」

　幕が開く。

するとそこには、もう、尋常じゃないくらいの焼きそばが用意されていた。

　畳一畳はあろうかという巨大鉄板の上に、これでもかという程に盛られた焼きそば。

　焼きそばの富士山や！

　なんて言葉が浮かぶが、すでに冷や汗が出てきていた。

「ルールは簡単！　制限時間以内により多く食べられた人の勝ちとなります！　皿に盛られた時点で計量、そちらを食べ切るとポイントとして加算されていきます！　予選上位２名が次の決勝ステージに行けるという超シビアな戦いだー!!」

「うおおおー」

　盛り上がる場内。

　マジかよ、焼きそばってそんなに食えないだろ……！

　まともに心の準備をする暇もなく、目の前には山盛りの焼きそばが盛りつけられていく。

「それでは準備出来たかな……！　フードバトルファイト……！　ゴー―！！！！！」

　勝負のゴングが鳴り響いた。

とりあえず一口口にしてみるが、確かに美う味まい。

　こういう焼きそばなどの料理は、とにかく大量に作った方が美味いのだ。

　しかし、言っても炭水化物のソースがけ。

　ちまちまと食べるが、そんなに量が食べられそうでは無かった。

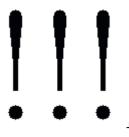
　さらにこの焼きそば、かなりの太ふと麺めんなのだ。

　もっちりとした麺の食感は美お味いしいものの、明らかに大量に食べるためには作られていない。

　一体他のメンバーはどうなっているのかと左端から覗のぞいていく。

　ズズズズズズズズズズズズズズ！！！！

「おーっと！　ここでジンベイザメの本領発揮だー！　まるで焼きそばを普通のそばのようにすすって胃袋に直接流し込み始めたー

」

「うおおおお！　焼きそばは喉のど越ごしを楽しむもんじゃああ

あー」

　えええええー!?

　どんな喉してんだよ！

　詰まって死ぬぞ!?

　まるで焼きそばなんて飲み物ですけど何か？

　とでもいうような顔でものすごいスピードでポイントを追加していく。

　こ、これはジンベイザメの一人勝ちか……!?

　そう思いながらも横を向いてみると、またしても驚きよう愕がくの光景が飛び込んできた。

「プリンセス・ギャル盛！　ここでお得意のデコレーション作戦だー!!」

　ジンベイザメの隣のギャルが、焼きそばの上にチョコを掛けて食べ始めた。

「甘いものは別腹～!!」

お前もどんな味覚してんだよー

「いや～解説の通りすがりの先生、これは脅威の作戦ですねえ」

「あああ～そうですねえ、女子はホントに甘いもの、いくらでも食べられますからねえ」

あれ!?　先生、いつのまに解説席に座ってんだよ！

見回りしないと！

っていうかこのステージを取り締まらないと!!

オレはちまちまと焼きそばを食べながらさらにもうひとつ隣のバトラーを覗のぞき見みる。

もうほぼ予想はついてたんだけど……。

「ふふふふ!!　甘さで味を変えようなんてまだまだ！　こっちはこれだー」

「出たー！！！！　セニョール森田の必殺技！　タバスコスプラッ

シュだあああ！」

　やっぱりね。というかもうナポリタンスパゲティみたいな色になってるけど、それでいいのかね？

　味覚とか……そういうレベルじゃないんだろうね……。

　軽い気持ちで参加したけど、ホント参ったなー。まあ普通に焼きそばの味でも楽しむかー。な？　Ｄ介デイースケ──……。

　そんな感じで隣を振り向くと、そこには他の参加者よりも明らかに大量に焼きそばを平らげているＤ介の姿があった。

「……な！」

「マ、マジ……!?」

「い、一体……！」

　すかさず司会者が声を張り上げる。

「おおおおっと！　こ、これは一体どういうことでしょう！　歴戦のフードバトラー達たちを押しのけて、淡々と一定のペースで食べ続けていた生徒さんが、まさかの１位だあああ！」

「これは番狂わせですね」

「まだ予選ということもあって、フードバトラー達が少し手を抜いているのかもしれませんね!?」

「なるほど！　そのあたりどうなのでしょうかー」

―違う。

　他の参加者達の表情を見れば一目瞭りよう然ぜんだ。

　彼らは本気だ、そして、Ｄ介デイースケの実力も相当なものなのだろう。

　何かを思い出したかのようにジンベイザメまっちゃんが声を上げる。

「……ま、まさか……アナタは伝説のフードバトラー……！」

「……マ、マジ……!?」

「嘘うそだろ……！」

　伝説のフードバトラーってなんだ……。

「かつてこのフードバトラー界の永久チャンピオンと呼ばれた、ジャイアント木き村むらを破り、フードバトラー界からの引退を決意させたという、伝説の男がいると言われていたが……まさかアナタなのか……!?」

　沈黙を貫いたままひたすらにマイペースで食べ続けるＤ介。

　Ｄ介にそんな過去があったのか、と驚くも、Ｄ介ならありそうとも納得する。

　それを見て、気を引き締めるように各バトラーが目の前の皿へと目を向ける。

「こ、こんなところで負けられるかよ……！」

「アタシも、本気にならなきゃね……！」

「フフフ、変なキャラ付けをしている場合じゃないな……！」

　そう言って必死で焼きそばを食べ続ける各フードバトラー達たち。

　キャラだったのか、なんてツッコミを入れる気力すらなく、オレは目の前の焼きそばを味わっていた。

　そしてついにタイムアップ。

　結果は━。

「お━━っと！　まさかまさかの波乱劇！　予選１位通過は主催高校の学生、Ｄ介さんだー

そして２位はフードバトラー・ジンベイザメまっちゃんだー!!」

「この二人で決勝を争うわけですね」

「はい、しかし……」

　司会者は参加者の一人である、ジンベイザメまっちゃんに目を向ける。

　そこには、もう既に限界という表情の男がいた。

「どうされますか？　決勝、戦いますか!?」

「……ふふふ、いや、もう無理だ……さすがに……実力の差は……わかってるつもりだ……でも……、戦えて……嬉うれしかった……よ……！」

　そう言って倒れこむまっちゃん。そして、すでにボロボロになっている他の参加者達たち。

　担架で運ばれていったり、なんやかんやバタバタがありながらも、優勝はＤ介デイースケということで幕引きを迎むかえたのだった。

　戦いから少しが経たち、今はＤ介と二人で校庭のベンチに座っている。

「Ｄ介！」

「ん～？」

「いや！　ん～？　じゃなくて！　フードバトラーみたいなさ！　なんなの!?　伝説なの!?　てかさっきのやつらもすごかったけど、Ｄ介それ以上なわけ!?」

「ああ～……なんか、中学校の時、近所で大会があって、それに出ただけだけど～」

「……」

　そうか、Ｄ介は普通に大食い大会に出て、普通に優勝したくらいの感覚しかないんだな……。それはそれですごいけど。

「あ、そういえばさっき優勝商品もらったから、せっかくだから使おうよ～」

「お、マジで？　何を貰もらった──」

「屋台食べ放題チケット」

「バカヤロー！！！！」

　お祭りならではのバカ騒ぎだったが、意外な（そうでもないか？）一面が見れて楽しかった。ちなみに、Ｄ介はその後、他の屋台でさらにたこ焼きやらを買って食べまくっていたそうだ。さすがだよ……伝説のフードバトラー……。

場所が変わって、再び校舎の中。

　こちらは、部室などが多くあるスペースだ。

　各部活の展示物や、出し物、催もよおし物ものがいろいろと開催されている。

　オレはそこでまたしても見慣れた後ろ姿を見つけた。

「お！　Ａ乃エーノ！」

「お、Ｅ記イーキ～おっつー！」

　オレの名前を呼びながら軽く手を挙げるのは、Ａ乃。

　少し焼けた肌、動きやすいようにと短くされたスカートの下には体操用のスパッツを履いており、短く切きり揃そろえた髪型からも、爽さわやかで快活そうな印象を受ける。

　相変わらず、空気抵抗的に無駄のないボディが――。

「死ね！」

「うわあ!?」

　突如Ａ乃のものすごい鋭さを持ったパンチが、オレの顔面めがけて繰り出される。

いやほんと、よく避けれたよ!?　突然なんなの!?

「……な、なにすんだよおまえ！」

「あんたがあたしの胸を見ながら空気抵抗が少ない凹凸のないボディだとか失礼なことを考えているからでしょうが!!」

「……え!?　エスパー!?」

「声に出てたわ!!」

そんないつも通りのやりとりを交かわす。

「そういえば、何てしたんだ？」

「ん？　ああ、気になる出し物があってさー」

「何何？」

「あ、これこれ～」

目の前には、『ゲーム同好会主催・レトロゲーム大会』と書かれた看板。

あ、なんか嫌な予感がするんだけど……。

「Ａ乃エーノ……？　これに出る感じ？」

「あったりまえじゃない！　レトロゲーマーとして出ない訳にはいかないでしょ!?　Ｅ記イーキも一緒に出ない？」

あー、これはフラグだな？

そうだよな？

　きっと変な奴やつらがまた出てくるんでしょ？

　そんな事を思いながら出場登録を済ます。

「ぶはははははは！　君のような女子が参加するなんて！　なあ？」

「…………玉砕覚悟？」

　……ほら出てきた。

　なんなの!?　この高校ってそういう変な人集まるんだったっけ!?

　一人は変な帽子を被かぶったおよそ高校生とは思えないような風ふう貌ぼうの太った男。

　もう一人は、メガネをかけ、基本的に俯うつむいている小柄な男子だった。

「勝負は簡単だ！　二人一組でこのバクダンマンを我々、ゲーム同好会の二人と戦ってもらう！　紹介が遅れたな、私はゲーム同好会主将！　山田名人！」

「自己紹介……四字高田……」

「ぶはははは！　こいつはキャラ付けのために四文字熟語でしかしゃべれない設定なのだ！　不便をかけて悪いな！」

　あ、やっぱりキャラなんだ。

　そして謝っちゃうんだ。

「……Ａ乃……この人たちって……有名人？」

「へ？　知らないよ？」

「あ、そっか～……Ａ乃エーノはちなみにどんな伝説持ってるわけ？」

「は？　はぁ？　伝説？　そ、そんなのないし」

　あー、なるほど、そう言っといて強いパターンね。

　まあ今回もオレは適当にゲームを楽しむとしましょう。

　それにしても、バクダンマンね。

　これは懐かしいゲームだ。

　それぞれ爆発まで時間や、威力が決められている爆弾を蹴けったり投げたりしながら、相手を爆発に巻き込ませたら勝ちという、単純だが、それだからこそ奥が深いゲーム。

　しかもかなり古いバージョンらしく、オレはプレイしたことのないハードでのプレイだ。

「うわー!!　ファミプレだ！　Ｅ記イーキ！　ファミプレだよー！」

「あのハード、ファミプレっていうんだ？」

「そうだよー！　スーパーファミプレの前の世代のレトロゲームの宝庫だよー！」

　Ａ乃はかなり興奮している。

　たしかに、昔のゲームってシンプルで面白いものが多かった気が

するな。

　さすがにこのバージョンのバクダンマンはやったことがないが、他のバージョンはやったことがある、多少は力になれるかもしれない……！

「よっし！　せっかくだから勝ってやろうぜ！」

　そうだよ、こっちにはレトロゲーマーのＡ乃もいるんだ！

「オッケー！　Ｅ記、足引っ張らないでよ～！」

　Ａ乃もやる気ばっちりだ、これはいける！

「ほう……勝つ気か……受けて立ってやる！」

「……笑しよう止し千せん万ばん」

　さっそくゲームがスタートした。

　見覚えのあるステージが目の前に広がる。

　まるで迷路のように配置された壁という壁。

　このゲームは、どのように相手を追いつめていくかが鍵かぎとなるゲームだ。

　オレは久しぶりの感覚に最初は戸惑いながらも、次し第だいに感覚を取り戻していく。

　しかし……。

「ふはははは！　普通にプレイするだけでは我々には勝てんわ！」

「……協力遊戯」

ゲーム同好会は巧みな協力プレイを仕掛けてくる。

　爆発までまだ時間がある爆弾を投げるのだが、それをパートナーが蹴けってくることによって、タイミングと方向を狂わせる巧みなプレイだ。

　間一髪避けられているが、これは長時間は辛つらい……！

　確実にまず雑ざ魚こであるオレを潰つぶしに来ているのか……！

　だが、一人に注力すると、もう一人がガラ空きになるのも事実！

　ここでＡ乃エーノが伝説のプレイを……!!

「Ａ乃……！　いま……！」

　振り返ったそこに居たのは……！

「……えい！　あれ？　と、とりゃあ!!」

　一人でゲームと格闘するＡ乃だった。

　え？　あれ？　Ａ乃さん……？

　レトロゲーム好きなんだよね？

　全然、上う手まい感じがしないんですが……？

「あ、ああ？　あれ？」

　チュドーン。

一人自分の爆弾で自滅するＡ乃。

　え？　激弱？

　というか初心者レベル……？

　そしてオレも当然よそ見をしていた間に爆弾に挟まれて爆発していた。

「……おい？　Ａ乃エーノ？」

「……な、なによぉ……」

　涙目、上目遣いでこちらを見てくるＡ乃。

　いや、可愛かわいい表情しても無駄だからな？

「お前……ゲーム激弱じゃねーの？」

「……よ、弱かったらゲーム好きじゃだめなの⁉」

「……いや、つーかお前オレより弱いだろうが！」

「……う、そ、そんなこと……ない……し」

「……お前、ヒゲ親父おやじブラザーズは１機で何面までクリア出来る？」

「い、１機⁉　そんなの１面も無理……！」

「お前ゲームオンチじゃねえか！」

　思わず怒鳴ってしまうレベルだ。

「……コ、コンテニューよ！　ゲームはコンテニュー出来るのがいいところなのよ！」

「はあ!?」

「何度でも挫くじけずに戦える！　諦あきらめない姿勢を養えるのが私がゲームが好きなところなの！」

　目を輝かせて反論を開始するＡ乃。

「……あ、あの～」

　それに対しておずおずと声を掛けてくるゲーム同好会の二人。

「……そ、そろそろ……出て行ってもらっていいですかね？」

　オレとＡ乃の剣けん幕まくに押されて、すでにキャラはどこかに行ってしまっている。

「「うるさい！　もう一回！　コンテニューだ！」」

　オレ達たちは声をそろえて再戦を申し込む。

　えー……という表情で渋々ゲーム同好会はゲームを開始するのだった。

しばらく時間が経たった。

　結局、ゲームは何度も何度も挑戦した結果、向こうの根負けというか偶然の連発によってオレ達たちが勝利した。

　一緒になって喜んだが、まあ正直、後半はほぼほぼオレだけが頑張っていたようなものだった。

　しかし、ものすごく喜ぶＡ乃エーノを見て、まあ本当にゲーム好きなんだなということもわかったので、あえてそれは言わないでおくことにした。

　ゲームが終わった後、Ａ乃とは別れ今は再び校舎の中をうろついている。

　ここは、クラスの出し物が多い辺りだ。

　それぞれ、喫きつ茶さ店やら様々な出し物が並んでいる。

　そういえば、自分のクラスで何してたかとか、そういう準備関係はほとんど参加しなかったなーという事を思い出す。

　いや、まあ、映画撮影も忙しかったしな……。

　でも後で少し顔を出してみるかな、なんてそんな事を考えていた。

　そしてあるクラスの前に差し掛かったところで、その異様な雰囲気に足を止める。

「おばけ……屋敷？」

中からは尋常じゃない悲鳴が聞こえる。

　ちょっと……凝こり過ぎじゃないか？

「あら？　Ｅ記イーキさん？」

　そこに、背後から掛けられる聞き覚えのある声。

　真面目まじめそうな眼鏡、パッツンの前髪など、どこをどうみても委員長キャラ！　もしくは秀才キャラ！　なのだが、実際のところはメチャメチャ学校の成績がいいという訳ではなく、やたらマニアックな雑誌などを読んでいる、オタク系女子だ。

「おう！　Ｃ奈シーナ」

「おばけ屋敷に興味が？」

「あ、ま、まあな……！」

「フフフ、いい心がけですね」

　そう言って微笑ほほえむＣ奈。

　心無しか、映画撮影を経てＣ奈の笑顔を見る回数が増えたような気がする。

「じゃあ一緒に行きませんか？」

「お、おう！　いいぞ……！」

まあ、当然そういう話の流れにはなるよな、と今日はそろそろ諦あきらめムードになってきた。

　これから作る映画の続編の参考にもなるかもだし、まあ、言っても高校の文化祭レベル……！　そ、そんなに怖がることもないだろう！

　一抹の不安を胸に、オレ達たちは受付を済ませ、さっそくおばけ屋敷の中へと入る。

「…………逝いってらっしゃいませ……」

　ちょっとまて？　受付の女子の言葉の意味が変な感じに聞こえたけど!?

　そんなツッコミをいれる間もなく、ぐいぐいとＣ奈シーナに引っ張られていくのだった。

　さて、中に入ると、これがやはりかなりの作り込みがされている。

　ほぼ、視界ゼロ。

　渡されたひとつの懐中電灯が照らす明かりのみが手がかりという状況だ。

　いやしかし、教室の中にどうやってこんな暗くら闇やみ作り出したんだよ！

　手がかかりすぎだろ！

「Ｃ奈、嫌かもしれないけど、暗すぎだから、ちょっと袖そででも掴つかんでて……？」

……ギュッ。

　おもむろに袖そでを握ってくるＣ奈。

　自分で言ったことだが動揺してしまう。

　暗くてよく見えないけど、きっとそれがなにか？　というような顔をしてるんだろうな。

　こっちは恥ずかしいに決まってるのに……。

「け、結構手が込んでるな～！」

「そうでしょうか？　今のところ暗くら闇やみにおける恐怖感の演出しかなく、少し間延びしている感じもしますがね？」

　いやでも、結構これ怖いだろ！

　いろいろとドキドキしているのがあるとはいえ、かなり一歩一歩慎重に進まないと、上から来るのか下から来るのかも分かんないぞ……！

「……ま、まあ、確かに？　オレ達たちが作った映画に比べたら――」

　――ドン！

「ひいいい!!」

突然の音に思わず声が出る。

　目の前には生身の人間が首つり状態でぶら下がっている。

「うおお!?　く、首つり!?」

「……なるほど。まあ恐らくは透明な台かなにかがあるのだと思いますが、結構ビックリするものですね。フムフム、次の演出に使えるかもですね、Ｅ記イーキさん」

「え？　へ？　あ、そ、そうだ、な!?」

「……？　どうしたんですか？」

「!?　ど、どうもしねえよ!?　いや、ビックリはするな！　確かに！」

　怖がるどころか、まったく驚いている様子のないＣ奈。

　こっちも怖いというよりも驚いただけだからなーという感じで話を合わせる。

　おいおい！　これが序盤かよ……！　やばいってやばい！

　これからどうなっていくんだよ！

　それからというもの、おばけ屋敷の中は阿あ鼻び叫きよう喚かんの悲鳴地獄と化した。

　主に……というか１００％オレの叫び声によって。

「Ｅ記さん……」

「は、はあ……はあ……な、なに……？」

「……もしかして、ホラー……苦手なんですか？」

　Ｃ奈シーナが首を傾かしげながら聞いて来る。

　まあそう思うよな。

　誰にも言っていなかったが、確かにオレはどちらかというと霊的なものは苦手だ。

　ただ、苦手というのと、嫌いなのとはまた別である。

　怖いものみたさとでもいうのだろうか、本来ホラー的なものには興味はあって、元々なにか作りたいと思っていたのだ。

　そして何よりも、オレはおばけ屋敷が好きではない。

　このおばけ屋敷が気合いが入りすぎているのもあるが、幼少の頃、おばけ屋敷ではぐれ、迷子になってしまってからというもの若じやつ干かんのトラウマを感じているのだ。

　久々だからもう大丈夫かと思っていたが、そんなことは無かったようだ。

「……そ、そんなことない……大丈夫……」

　どこからどうみても大丈夫では無いが、オレは出来る限りの笑顔でそう応こたえる。

「……」

　すると、Ｃ奈シーナは掴つかんでいたオレの袖そでを放し、おも

むろに手を握ってきた。

「□□!?」

「はやく出ましょう」

　やばい、は、恥ずかしい。

　今絶対オレ赤面してる。

　おばけ屋敷で怖がっていたこともあるが、それにも増して同級生の女の子に手を引かれて……！

「あ、Ｃ奈……あの……！」

「大丈夫ですよ」

　暗くて表情は見えないが、声のトーンが優しい。

　少しだけ、心が落ち着くのを感じた。

　おばけ屋敷の方も、もうすぐで終盤という雰囲気が漂ただよってくる。

　外の明かりが見える。

　と、とりあえず助かった──。

　そう思った、瞬間だった。

　ダン!!

　道の両方の壁から生えてくる、手、手、手、手！！！！

「ギャアアアアアア！」

　思わずＣ奈シーナに抱きついてしまう。

「あ、ちょ！　キャッ！」

　Ｃ奈は突然抱きつかれたことでバランスを崩し、そのままよろめきつつ、出口のカーテンを抜け出たところで倒れこんでしまう。

　むに。

　気が付くと、オレとＣ奈は廊下に飛び出ていた。

　オレの手には柔らかい感触。

　そしてオレの下にはＣ奈が寝転がっている。

　ざわ……ざわ……。

　廊下でたくさんの生徒達たちから視線を集めるなか、オレは、Ｃ奈の胸を揉もんでいた。

「……そろそろどきましょうか？」

　笑顔が引きつっている。

　最近笑顔も見せてくれるようになったなーと思っていたが、怒るとこんな感じになるんだな、ということを初めて知った。

「……ち、違うんだああああああああああ！」

　状況を理解したオレは慌てて飛とび退のき、頭を抱えて俯うつむく。

　ヒソヒソと何かを言う生徒達たちの声が胸に突き刺さる。

　この場にＡ乃エーノとかＢ香ビーカがいたら確実に殴られていただろうなー。

　いっそその方がよかったかもしれないなんていう思考にまで至る。

「ああああああ……」

　まるで先生のようなうめき声を出していると、頭上から、予想外の反応が返ってきた。

「……ぷっ」

「……へ？」

　顔を上げてみると、そこには笑いを堪こらえきれないという感じのＣ奈シーナの表情。

「Ｅ記イーキさん……慌てすぎです……ふふっ」

「あ、え？」

　どうやら全然怒っていないようだった。

オレは安心したやら、なんやらで、きっとへんな表情をしていたと思う。

　その後、近くの自販機で紙パックのジュースを買って２人で飲みながら休憩をしていた。

　Ｃ奈シーナは冷静にこういう仕掛けだったと思うけど、これは映画にも使えそうとか、いろいろと意見をくれた。

　あの暗くら闇やみの中でそこまで考えながら歩いてたなんて……恐るべし、Ｃ奈。

　でもそれにも増して恐ろしいと思ったのは、別れ際の一言だった。

「今日は、２つもＥ記さんの弱みをにぎっちゃいましたね」

　一つはおばけ屋敷での失態。そしてもう一つは、まあ、あの事だよな……。

　一体どんな時に何をやらされるのだか、と戦々恐々としたが、意地悪そうに笑うＣ奈を見て、それもまた少し魅力的な表情だななんて思うのだった。

さて、オレはまたしても校庭の方へと歩いて来ていた。

　そろそろ、射的だとかそういう系の屋台もしっかり回りたいなと思っていたからだった。

　それに、ここまでくると映画研究会のメンバー全員と会っておきたかった。

　いろいろと回ってきたが特に見なかったので、そろそろ校庭の方にいるかもと思っていたのだった。

　キョロキョロと周りを見渡す。

　結果は、ドンピシャ。

　小柄な体を、人とぶつからないようにさらに小さく丸めて進む後ろ姿がそこにはあった。

「おーい！　Ｂ香ビーカー！」

「！　あ？　あれ？　Ｅ記イーキくん？」

　小さな身長、女性らしいフェイス、ダボダボな制服での萌もえ袖そで。

　会えて嬉うれしい！　という表情を満面に漂ただよわせるまるで子犬のような可愛かわいらしさ。

　Ｂ香が女だったら間違いなく彼女にしたいね。

「いや～ホントＢ香ってかわいいよな……！」

「……え？　え？　と、突然なに言ってるの!?」

　Ｂ香が赤面して照れ始める。

　いやいや、なんで照れるんだよ！

　女子か！

「もう屋台は回ったのか？」

「……え？　あ、ううん……これからだよ？」

「お、そっか、じゃあ一緒に回らないか？」

「……い、いいの？」

「おう！　Ｂ香の好きなところについていくぞ！」

「……ありがとうっ！」

　そうして、２人で屋台を回り始める。

　Ｂ香ビーカは風ふう貌ぼうよろしく、まるで女子のようなチョイスで屋台を選び始めた。

「あ、えっと、あの……あれ……食べてもいいかなあ？」

「ん～？」

　照れながら指差した先は、綿わた飴あめ。

「いいんじゃね？　っていうかなんでそんな恥ずかしそうに……」

「こ、子供っぽく……ないかなあって……」

　オレが言うのも変だけど、ホント萌もえキャラだわ……。

　恐ろしい……！

　恐ろしいぞ！　Ｂ香！

「いいんじゃね？　つーか祭りなんだしさ！　オレもひさしぶりに食べたいし」

「そ、そうだよね！　よかったじゃあ買ってくるね！」

「おう！」

　その後、綿わた飴あめを美お味いしそうに食べるＢ香と一緒に様々な屋台を回る。

　Ｂ香は基本的に可愛かわいいもの、甘いものに目がなかった。

　チョコバナナやリンゴ飴あめなど、定番のものにはすべて食いつくのだった。

　その度に恥ずかしそうにしながら、だめかなあ？　なんて聞いてくるものだから、だめなわけないじゃんか！　と応こたえないわけにはいかなかった。

　そしてしばらく歩いた後、一つのお店の前で立ち止まる。

「どうした？」

「……あ、飴細工……だ……」

「ん？」

　屋台の中でもあまり人の入りが多くないだろうそれは、飴細工の屋台だった。

　飴で作られた動物や、キャラクターなどが並んでいる。

　小さな鍋なべに砂糖を入れると手早くかき混ぜ、それがまだ温かいうちにピンセットやハサミなど、いろいろな道具をつかっておじさんが今まさに目の前で作ってくれている。

　この屋台はさらに飴細工体験も出来ると書いてある。

　Ｂ香ビーカは手先が器用なので、こういったものが好きなのかもしれない。

「やってみるか？」

「……い、いいかな？」

「おう！　ただ、オレやったことないからさ、一回手本みせてくれよ？」

「え？　て、手本？」

「うん。おじさん！　一人体験いいかな？」

「あいよ～」

　そう言っておじさんは愛想良く細工道具の入った袋を手渡してくれる。

　それと同時に鍋の中に砂糖を入れ、かき回す。

ある程度の柔らかさになってきたところで、Ｂ香にそれを渡した。

「スピードが命だからねー」

「……」

　和やかな雰囲気のおじさん。しかし、Ｂ香の表情は真剣そのものだった。

　ふっと息を吸い込むと、眉み間けんにしわを寄せるように目を細め、ピンセット、ハサミなどの専門の工具で素早く作業をこなしていくＢ香。

「お、おお……！」

「ほう……！」

　オレもそうだが、おじさんも感心している。

　これはやはり相当な手練てだれだったようだ！

　今どこの部分を作っているのか、そういうことも全然分からないくらいのスピード感で作業を続けるＢ香。

　最さい後ごの最後にハサミでパチパチと切り、それを広げるとそこに見覚えのあるものが出来上がっていた。

「……これ……オレ⁉」

　そう、そこに現れたのはオレをデフォルメしたような、それでも

一目でオレと分かるような飴あめ細工だったのだ。

「すげえ！」

「……ふうー……な、なんとか出来た……よ」

　そう言って微笑ほほえむＢ香ビーカ。

　おじさんもその出来に感心している。

「いや参った。動物とかよりもよっぽど難しいものを作り上げるなんてな！　おじさん参っちゃうわ！」

　ハハハと笑うおじさん。

　素人では出来の善よし悪あししか分からないが、それ以上に作ったものも相当難しいようだ。

　おじさんはこっちを向いてさらに続ける。

「そっちの兄ちゃんはやらないのか？　サービスするよ」

「え？　オ、オレっすか!?　いや、でも……」

「……あ、Ｅ記イーキくんもやろうよ……！」

「え～……まあ……じゃあ……」

「じゃあおじさん、ボクももう一回やるから、２人分ね！」

　そう言ったＢ香の隣に座るオレ。

　目の前にはさらにもう一セットの細工道具が置かれる。

しかしいざ座ってみると頭の中が真っ白になるな……。

「あのさ……Ｂ香、せめて、何作ればいいかな……！」

「え？　あーじゃあ……映画研究会の誰か……とか？」

「え？　あ、あーじゃあ……とりあえずオレはＡ乃エーノ作るわ！」

　Ａ乃なら失敗しても怒られないだろ。

「……あ、うん、じゃ、じゃあ……ボクはＣ奈シーナさん作るね……」

　なぜだか少ししょんぼりするＢ香。

　ん？　Ａ乃作りたかったのか？

「ほい！　２人とも！」

　あれこれ考えているとおじさんから飴あめの塊が２人に手渡された。

　やべえ……！　何をどこからどうしたらいいのか分からねえ……！

　隣でテキパキと作業をするＢ香を横目で見つつ、おっかなびっくり作業を続ける。

　そして、約１分程で、飴は固くなってきてこれ以上弄いじりようが無いという感じになってしまった。

「……なんだこれ……」

オレの目の前、出来上がったのはもはや人間……とも思えないような物体。

　かろうじてオレが頑張ったＡ乃の髪型の外ハネが、もはや怪獣の牙きばのようにすら見えてしまう。

　かたや、隣には特徴を良く押さえたＣ奈が出来上がっていた。

　メガネの再現度や、独特の表情までが完かん璧ぺきだった。

「あっはっは、良かったよ～兄ちゃんまで上う手まかったらいよいよ店じまいだと思ってたところだ」

　お店のおじさんが笑いながら話しかけてくる。

　なるほど、優しさの裏にはそういう魂こん胆たんもあったわけか……。

「……えっと、あの……もう一回……やる？」

「やる！　こうなったら映画研究会全員作り上げてやる！」

「え？　あ、そ、そうだね……！　じゃ、じゃあ！　ボクはＤ介ディースケくん作るね……！」

「おう！　ならオレは……」

　考えてみて、ハッと気が付く。

「オレは、Ｂ香ビーカか」

「あ、そ、そうなる……ね？」

照れくさそうに上目遣いでこちらを見上げてくるＢ香。

　こ、これは確かに照れるかもしれない。

　さっきはＢ香がオレを作ってるって知らずにいたから大丈夫だが、目の前で自分を作られるというのは恥ずかしいかもな。

　こ、これはせめてさっきのＡ乃エーノよりは上手く作らなければ……！

「よっし！　おじさん！　２人分追加な！」

「あいよ～」

　そうして、またしても飴あめの塊を渡される２人。

　先ほど学んだのだが、とにかく、失敗を恐れてはダメだ。

　ある程度の失敗は、まだ柔かなうちは取り消すことも出来る。

　全体を見つつ、どこを伸ばして、どこを鋭角にするか。

　そのビジョンを明確に持ち、そして一気に完成まで持っていく──！

　そして出来上がったのは……！

「だめだー！！！！」

　出来上がったのは、とてもＢ香とは思えないような、というか相変わらず人とも思えないような塊だった。

「すまん！　Ｂ香ー!!」

Ｂ香の手には、これももうバッチリという感じのＤ介デイースケが握られている。

「え？　ええ……？　でも、えへへ……全然……う、うれしい……よ？」

　そう言ってオレの作った不細工な飴細工を受け取る。

　なんて優しいのだろう。

　その表情は作り笑いかもしれないが、本当に喜んでいるように見える。

　天使か！

「ふ、ふがいないのが２体あるが、とはいえ映画研究会全員を作るという目的は果たした……おっちゃん……ありがとうな！」

「ははは！　また上う手まくなったら来いなー」

「あ、ありがとう……ございました……」

　おじさんが、それぞれの飴あめがくっつかないようにビニールの袋に入れてくれる。

　これは後でみんなにも渡してやろうかな。

　……一人、激怒しそうなやつがいるけど。

　　　＊

さて、Ｂ香ビーカと２人で校舎を歩いていると、そこでちょうど集まっていた３人を見つけた。

　Ａ乃エーノ、Ｃ奈シーナ、Ｄ介デイースケだ。

　これで映画研究会の全員が集まったことになる。

「おー！　みんなー！」

「あ、Ｅ記イーキ」

「どうしたんだ？」

「いえ、ちょうど今偶然あったところだったんです」

　ニッコリと笑うＣ奈。オレは先ほどのこともあって顔を直視することが出来ない。

「Ｅ記たちはなにしてたの～？」

　Ｄ介がまた何かを食べながら質問してくる。まだ何かを食べている事に関してはスルーしかない。

「ああ！　そう、これこれ！」

　そう言って、個別の飴細工をＣ奈、Ｄ介に手渡しする。

「……飴細工？　もしかして手作りなんですか？」

「おう！　……ってもＢ香が作ったんだけどな……」

「おーすごーい～」

　Ｄ介、Ｃ奈はそれを受け取って感嘆の声を上げる。

　それはそのはず、特徴をしっかりととらえた似顔絵を、さらに立体で浮き立たせたような素晴らしいクオリティなのだ。

「え？　え？　わ、私は？」

それを覗のぞき見みながら、はしゃぐようにこちらを見てくるＡ乃エーノ。

　オレは顔を引きつらせながらＡ乃にも飴あめ細工を手渡す。

「……お、おう……あるぞ……？　オレの手作りだ……」

「え!?　Ｅ記イーキが……作ってくれたの？」

　顔を赤らめるくらい喜ぶＡ乃。

　しかし、丁てい寧ねいにビニールを取り終わると、その顔はみるみる別の意味での赤色に変わっていった。

「……これ……私なのよね？」

　確実に怒っている。

　まあ、そうですよねー。

「違うんだ！　落ち着けＡ乃！　これでも一いつ生しよう懸けん命めい頑張ったんだ！　決してＡ乃がこんな怪獣のような顔をしているなんて思っていな──」

「誰が怪獣だああ！」

　──ブン！

「うおおお!?」

脇腹を抉えぐるようなストレートをすれすれで躱かわす。

　だから当ったら致命傷だって！

「しょ、しょうがねえだろー!!　初めてで難しいんだよ！」

「あんたねえ！　それでももうちょっとやりようってものがあるでしょー！」

「ぐ……じゃ、じゃあもうそれ返せよ！」

「……え、いや、そ、それはダメだけど……」

「？」

「こ、こんなんでも一応手作りだからね、も、もらってあげるけど……！」

　なんなんだよ！

　不機嫌なんだか、意味不明なやつだ……。

　まあただ、なんだかんだありつつも、ここしばらくずっと一緒にいた５人だ。

　集まるとそれだけでしっくりくる感じがする。

　　　＊

「あああ～集まってどうしたんだ？」

　そんなこんなで和わ気き藹あい々あいとしていると、そこにさらに先生がやってきた。

「あ、先生！　いや、用事とかは特にないんですが、たまたま集まりまして」

「おーそっか～」

　相変わらず、やる気があるんだかないんだか分からない先生だ。

「あ～そういえばＥ記イーキ。お前なにかやったのか？」

「へ？」

「なんか、クラスのやつらが怒りながら探してたぞ～？」

　怒りながら？

　どういうことだろう？

　特に怒られる理由が分からない……。

「あんた、なにかしたんじゃないの？」

　ジト目で睨にらんでくるＡ乃エーノ。

　いや、本当に理由が分からないんだけど……？

　どういうことだろう？

　オレが頭の上に「？」マークを浮かべていると、そこにちょうどクラスメイトの女子が２名ほど通りかかってきた。

「あーＥ記イーキくん!!　いたー！」

「え？　え？」

　すごい剣けん幕まくでこちらに近づいてくる。

　え？　マジでなにかしたの？　オレ？

「ずっと出し物手伝ってくれなかったじゃない！」

「さすがに今日くらいは手伝ってよね～！」

「え？　あ、ああ、そういうこと？」

　なるほど、クラスの出し物を手伝ってないことに怒っているわけか。

　確かに、ちょっと悪いなという気持ちもあったので、何も言い訳することができない。

　とはいえ、映画研究会のみんなとせっかく会ったばかり、これから一緒に文化祭を楽しもうかという話もしていたところだ。

　そうなると……。

「せっかくだし、みんな手伝ってくれよ」

「はあ？　何言ってんの？　同じクラスじゃないじゃない！」

「いやいや！　そ、そんなことないぞ！　みんなで何かを一緒にやることによって、より連帯感を高めるというかだな……！」

「また、Ｅ記適当なこと言って……！」

　困ったような顔をするＡ乃エーノ。

　オレは助けを求めるようにＢ香ビーカとＤ介デイースケを見る。

「……あ、ボ、ボクはどっちでも……いいけど……」

　おどおどと同意してくれるＢ香。

「ん～俺も別に～？」

　Ｄ介も特に異論なく、同意してくれる。

　オレは２人の同意を持って、Ｃ奈シーナを見る。

「私も別に構いませんよ？」

「……もう、ほんっと自己中なんだから！」

「ただ……」

　やれやれという表情で溜め息いきを吐つくＡ乃エーノ。

　しかし、Ｃ奈シーナが手をあげて、言葉を続けた。

「□□Ｅ記イーキさんのクラスでは、どんな出し物をしてるんです？」

　オレの顔を見てくる４人と先生、そして、クラスメイトの女子２名を見る、オレ。

「知らないのかよ!!」

　ワンテンポ置いてオレにパンチを繰り出してくるＡ乃。

　そして、Ａ乃に同意するように冷たい視線を投げかけてくるクラスメイトの女子。

「待て！　ま、待つんだ！　し、知らないわけないだろう!?」

　そうだ、ちょっとど忘れしてしまっているだけだ。

　えーっと、そう、あれ、あれだよな。

「どうでしょう、今日もあんなことをしてましたしね……」

「あああー！　Ｃ奈!?」

　おっと、という感じで口を押さえるＣ奈。

　いや！　絶対わざとだろう！

「……あ、あんなこと？」

「Ｂ香ビーカは気にしなくていいんだぞ～！」

「……」

「Ｄ介デイースケはもう少し気にしなさい！　いつまでも何か食べてるんじゃない！」

「あああ～……」

「先生は黙って!!」

　えーっと、あれ？　あれだよ！　そう、そうだ。あれ？　そうか。

　オレの脳内のシナプスが繋つながるのを感じる。

「──メイド＆執しつ事じ喫きつ茶さだ」

「「「「……はあ？」」」」

＊

　場所は変わり、オレのクラス。

　内装が、いつの間にか中世ヨーロッパ風の豪ごう奢しやな感じになっていた。

　もちろん、照明などはどうしようもないのだが、うまく卓上にキャンドルを置くなどして、しっかりと雰囲気作りがされている。

　オレが知らない間に、みんな頑張ってたんだなーというのが伝わってくる。

「お！　Ｅ記イーキ似合うじゃん～！」

「……う、うるせー」

　お客さんも結構来ているようで、手伝いは本当に必要だったらしい。

　かなりバタバタとしている中で、フロアを出来るスタッフが必要なようだ。

　……というわけで、オレは執しつ事じ服を着せられている。

　クラスの男子が茶ちや化かすように声をかけてくる。

「Ｄ介デイースケも巻き込んでごめんな」

「ううん～」

　隣には執事服を着たＤ介。

　相変わらず前髪で表情は見えないが、元々かなりスタイルがいいＤ介だ。

　正直かなり執事服は似合っており、かっこいい。ちなみに２人ともメガネ着用だ。

　周りからも黄色い声が聞こえてくる。

「かっこいい～……！」

「どっちが受け？　どっちが受け？」

　うん、一部黄色くない声も聞こえてきたが気のせいという事にしておこう。

　そして、一緒に連れてこられたＡ乃エーノ、Ｃ奈シーナ、Ｂ香ビーカ……そして先生もなぜかフィッティングルームに連れて行かれている。

　フィッティングルームが２人入れるか入れないかくらいなので、着替えには少し時間が掛かるようだ。

　それにしても、Ａ乃エーノとＣ奈シーナのメイド服か……。

　軽く想像をしていると、教室中の生徒からざわめきが起こった。

「……うおおお！」

「かわいい～！」

　男子も女子も歓声をあげている。

　オレはそちらを振り返ってみると、そこには、メイド服姿で赤面しているＡ乃と、落ち着いた様子で佇たたずむＣ奈がいた。

「…………おお」

　正直、めちゃめちゃ似合っている。

　Ａ乃は、そのスレンダーな肢し体たいに似合う、少しミニな感じのメイド服。

　特にいいのが、絶対領域だ！

　オーバーニーソックスと、スカートの間のその生太もも！

　Ａ乃の美脚をさらに強調する、素晴らしい衣装だと言える。

　また、普段ではお目にかかれない、メガネ姿というのもポイントが高い！

　そしてそして、Ｃ奈のメイド服！

　シックな雰囲気とそのメガネとが、本格的なゴシックメイドという雰囲気にマッチしていて、まるで中世の世界にタイムスリップしてしまったような感覚すら覚える。

　しかしながら、なによりも特筆すべきなのは、その……胸部だろう！

　圧倒的ボリューム感。

　なんというか、メイド服ってその構造上、さらにその胸部を豊か

なものに見せてくれるというか、それはもはや大地が与えたもうた豊ほう饒じようなる──。

「な、なにニヤニヤしてんのよ……！」

　Ａ乃が恥ずかしそうに涙目になりながら非難の声をあげる。

「いやいや！　マジで似合ってるって！　自信持っていい！　めっちゃかわいいよ！　なあＤ介デイースケ？」

「うん～似合ってるよ～」

「ううう～……恥ずかしい……Ｃ奈シーナは恥ずかしく無いの？」

「別に……？　これといって恥ずかしいということはありませんが？」

「むうう……！」

　Ａ乃エーノはまだ多少赤面しているが、覚悟を決めたのか、なんでも注文しなさいよ！　という感じで仕事に取りかかろうとする。

　いや、それじゃ、ツンデレ喫きつ茶さになっちゃうから……！

「……あれ？　というか、Ｂ香ビーカは？」

「先生もいないよね……？」

　Ａ乃達たちが出てきてからもうしばらくが経たっているが、２人の姿が見当たらなかった。

キョロキョロと見渡すと、ちょうどそのタイミングで、なんとも言えないようなざわめきが起こる。

「おおおおお！　……おお？」

「かわいいいいいー!!　あと、あれ？」

　一体何が起こったんだと思い、そちらの方を振り向くと、そこには──。

「ふ、ふえええええ……み、みないでぇ……」

「あああ～……」

　メイド姿のＢ香と、先生が居た。

　Ｂ香は恥ずかしいのか、Ｄ介の後ろに隠れている。

　そのせいもあって、全体がしっかりと見えないが、その姿は確かに凄すごかった。

　正直、めちゃめちゃかわいい！

　何度も心の中でツッコミを入れて来た言葉だが、改めて言わせてもらいたい。

　──女子か！

　しかも、かなりかわいい女子だ。

　いやもうしっくり来過ぎでしょ！

違和感ゼロどころか、プラス補正だらけじゃないか。

……それに引き換え。

先生はもうどうしようもないな。

これは、文化祭で無ければ逮たい捕ほされるレベルだ。

なぜか親指を立ててドヤ顔をしているのもとてもムカつく。

先ほどのざわめきの理由も分かった。

「Ｂ香ビーカ……めっちゃ似合ってるよ！」

「……い、嫌だよぉ……」

「え～いいと思うけどな～」

「……傷も、見えちゃいそうだし……」

Ｂ香のスカートから、生足が覗のぞいている。

おいおい、傷とかよりもなんか来るものがあるんだけど！

「いや、大丈夫だって！　見えないし気にするなよ！」

「ぐ……く、悔しいけど……かわいい……なんか悔しいけど……」

「Ｂ香ちゃーん……フフフ～こっち来てお化粧もしちゃいますか～」

Ｃ奈シーナは何やら興奮しているし、Ａ乃エーノはなにかずっと悔しがっている。

「あ、先生は……」

「先生はいいです！」

先生の事を無視して大盛り上がりするオレ達たち。

クラスのみんなもかなり盛り上がっていた。

　これは、結構話題性があるんじゃないか？

「よし！　Ｂ香こっちこい！」

「……え？　えええ？」

　オレはＢ香ビーカの手を引っ張って廊下へと連れて行く。

「うちのクラスではメイド＆執しつ事じ喫きつ茶さやっています～よければお茶していきませんか～！」

「……え、えええ……！」

　恥ずかしがって真っ赤になっているＢ香に、ほら、お前も声出してと耳打ちする。

「あ、あの……よければ……！　寄っていってくださいぃ……！」

　廊下を歩いている生徒の好奇の目が集まる。

「かわいい～」

「執事もカッコいいよ～寄ってかない？」

　予想通り、とても好評なようで次々に教室の中にお客さんが入っていく。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

　オレはうろ覚えの挨あい拶さつをすると、Ｂ香に対してウインクを飛ばす。

「……お、お帰りなさいませ、ご主人様」

　かなりの赤面。

　でも、お客さんはそれで「かわいい～！」と大興奮している。

　中に入っても、Ａ乃エーノ、Ｃ奈シーナ、Ｄ介デイースケなどが、声を揃そろえて迎むかえ入れていた。

「やだ！　超クオリティ高いんだけど！」

「女の子もすっごいかわいい～！」

「うおお！　あのメイドさんかわいい……！」

「いやいや、お前こっちのメイドさんもかわいいって……！」

　喫茶店の中に入った男子も女子もとても喜んでいた。

　オレ達たちはオレ達で、昨日のお客さん対応などで慣れていたので、テキパキとお客さんに対応していく。

　やっぱり、なんだかんだいって、この５人で一緒なら楽しいんだなって、そんなことを改めて感じる。

　オレとＢ香ビーカはさらに声を出して宣伝をする。

「ぜひ！　メイド＆執しつ事じ喫きつ茶さに寄っていってください

ませ～」

　　　＊

　そしてそれからしばらくが経たった。

　今は部室として使っている音楽室の中でみんなくつろいでいる。

　今日は出し物は特にないが、吹すい奏そう楽がく部の荷物などが散乱している。

　昨日、たった１日前には映画の上映をしていたその教室だ。

「ふいー！　つかれたー……！」

「お疲れ様～、Ｅ記イーキ」

「Ｅ記さん、お茶どうぞ」

「おーありがとう！　Ｂ香もＤ介デイースケもお疲れ！」

「……あ、お、お疲れ様……」

「おつかれ～クッキーもらったよ～」

　時間帯もあったのか、予想を超える大入りとなった我らがメイド＆執事喫茶。

　もうそろそろお客さんも減ってくる時間だから、とクラスメイトからも許可が出て、オレ達たちは手伝いから解放されることとなった。

　元はと言えばオレが全然クラスメイトの手伝いをしなかったことから始まったのだが、最終的にはクラスメイト全員から感謝されることになった。

まあ正直、オレも仮装みたいで楽しかったし、きっとみんなもそう思ってるんだろうなって、そういう気がする。

最初はかなり恥ずかしがっていたＢ香だって、最終的にはちょっと乗り気で「お帰りなさいませ、ご主人様っ！」って言ってたしな。

そしてその度に萌もえもだえる男子生徒を見て、若じゃつ干かんの罪悪感を感じていた。

すまん。女子ではないんだ。

信じられないかもだけどな。

今はオレのクラスからお裾すそ分わけしてもらったクッキーやらお茶で軽い打ち上げをしているところだ。

「なんかさー……」

オレは特定の誰かに言うでもなく、声に出す。

「今回の文化祭、すっごい楽しかったよな」

「……うん、そ、そうだ……ね」

「昨日も思ったけどさ、なんか、終わんなきゃいいのになーなんて」

なんて、そんなセンチメンタルな事を言ってみる。

「まあね、でもさ、来年もまた、上映会するんでしょ？　５人で」

「おう！　もちろん！」

「私もそれまでにはいろいろと編集技術を向上させとかなきゃですね」

「ん～俺も、カメラもっといいやつ欲しいなあ～」

　でも、みんなはもう、ちゃんと前を向いている。

　らしくもないな、なんて、自分で笑えてしまう。

「よっし！　次はさ、前回よりももっともっと面白くしよう！」

　オレは大げさなジェスチャーでみんなに話し掛ける。

「ベースは前回のやつにするんだよね？」

「うん、そうだなー。でもせっかくだったら結構変えていきたい気はするな」

「……変えちゃうの？」

「おう！　たとえば話を逆からやるとか、テーマはこのままでも、もっといろいろとやり方があるんじゃないかなって思うんだ。リヴァイバルっていうの？」

　オレの言葉を聞いて、Ｃ奈シーナが溜ため息いきを吐つきながら補足する。

「リヴァイバルは再上映って意味なのでちょっと違うかもですけどね……でも、完成した映画をリヴァイバル上映って言って流したら、それはそれで面白いかもですね」

「いいな！　終焉シユウエンノ栞シオリリヴァイバル」

「あ、でもさ、せっかくだったら、もういっそのことまったく変えちゃうっていうのもありじゃない？」

「んーたとえば？」

「たとえば……いっそ南の島編にしちゃうとか！」

「……は？」

　Ａ乃エーノが目を輝かせながら続ける。

「青い太陽！　青い海！　沖縄を舞台にした青春映画にしちゃうっていうのは！」

「ジャンルも違うのかよ！」

「なによ～！　旅行行きたいじゃない～！」

　ああ、そういうことか。

　確かに、この５人で旅行に行ったら楽しいだろうな。

「いや、旅行は行きたいけどさ！」

「……い、いいと思います！　登場人物のＡ弥エーヤとＣ太シータの友情物語……！」

　Ａ乃に続いて、Ｂ香ビーカも同意する。

「いいよね～！　夜は温泉宿を舞台にするの」

「だからジャンルが！　……いやでも、温泉だと入浴シーンは必須。なにかそれは男としてのロマンを感じる……」

「卓球とかもあるしね～」

　完全に話が脱線したところで、Ｃ奈シーナが話を戻す。

「もう、そもそもは何か良く分からないノイズが入っていたから、もう一回撮り直して検証しようってことから始まってるんですよ？」

　お互いを見て、笑い合う５人。

　まあ、正直最初のきっかけはどうでも良くなってきていた。

「私としては、今回のおばけ屋敷で学んだトリックを使ってですね、いきなり首つり死体から始まるような、そんなホラー要素を強

めていく手法をいろいろと試したいところですね」

「あ～それ撮るの面白そうかも～どういうトリックだったの？」

「あ、それはですね……暗くら闇やみの中で透明な台を用意しておいて……」

「なるほど、あ、でもそれならカメラで映すなら……」

　首つりについて論議を交かわすＣ奈とＤ介デイースケ。

　なんか、高校生の会話としてはかなり怖い雰囲気だ。

「なんかＥ記イーキは具体的な案ないの～？」

「ん～そうだな……」

　そして、そんな２人の会話を置いておいて、Ａ乃エーノが問いかけてくる。

「オレはあれだな、『犯人はお前だ！』っていうシーン？　やりたいな！」

「はあ？　だから、それには犯人決めなきゃでしょ？」

「んー、どうにかなる気がするんだよなー」

「どうにかなるってなによ～！」

「まあ、それは追々！」

「絶対なにも考えてないでしょ！」

「そ、そんなことないぞ⁉」

「あはは～」

「まあ、もう慣れましたけどね」

「……うん……そ、そうだね……」

いつものように、騒がしく話すオレ達たち５人。

その時は、ちょっとの寂しさと、これからまた始まる刺激的な日々の事を思い、なんだか少し浮かれていたと思う。

だから、だろうか……。

その時どこかで聞こえた、たった一つの呟つぶやきは、

……オレの耳には届かなかった。

CHAPTER2
シュレディンガーの猫は鳴く

文化祭が終わってから、またしばらくが経たった。

オレたちはすぐに撮影を始めており、今はその撮影の最中だ。

いろいろな案が出たが、結局のところ「リヴァイヴァル」と言っていた案を採用することとなった。

それぞれが巻き込まれる都市伝説を変え、ストーリーも大幅に変更。

最初は、もう一度撮り直して再現しようという話だったが、やるのならばと、どんどんみんなアイデアを出し合った結果、ほとんど新作のような形になってしまっている。

今回もいろいろな事があったが、確実に前回よりもいい感じに撮影出来ている感触があった。

ただ、少しだけ。

ほんの少しだけ、前よりも刺激が足りないなんて、そんな事を思っていたかもしれない。

前回は初めてのことだらけで、トラブルもあり、全てが新鮮で――。

でも、当然みんなでの撮影は楽しくて、不満なんて、何一つ感じていなかった。

*

いよいよラストシーンを撮影することになっている。

シーンの通称は、「シュレディンガーの猫編」というものだ。

とにかく色々と相談しあったのだが、これがラストシーンだ。

骨を通せば肉がつくというか、ひとつ答えを用意する事で、なにかわかるものもあるかもと思い、脚本を書いた。

前回は謎を投げっぱなしにしてしまったが、今回は一応の結末をつけているつもりだ。

もちろん、撮影してみて、どのようになるか分からないが、演出としてもとてもチャレンジングな事が出来るのではと思っている。

……ただ、それは『終焉シユウエンノ栞シオリ』の終わりを意味する。

オレとしてもとても寂しいし、おそらくみんなも寂しいと思っているだろう。

でも、オレは信じていた。

この５人なら、ちゃんと『終焉シユウエンノ栞シオリ』を終わらせることが出来るって。

それに、『終焉ノ栞』が終わっても、他にも撮影したいアイデアもある。

きっと何をやっても楽しめる。

たぶん、このリヴァイバル編は、ボーナスステージだったんだ。

文化祭の後からのモラトリアム。

後夜祭の残り火が、くすぶっていただけ。

でも、ちゃんとラストを撮影して、また一つの映画にして、お客さんに上映して……。

　そうすれば、きっと前に進める。

　とにもかくにも、ラストシーンだ。

　このラストシーン、こだわりはもう一つある。

　どうしても、このシーンの撮影を、夜の学校で行いたかった。

　これまで頑張って、夜のシーンを暗くら闇やみを作り出すことで演出してきたが、やっぱり本当の夜の学校で撮影を行いたい！

　しかし、問題は学校の許可だった。

　当然のごとく、許可が下りる訳がない。

　それどころか、バレたら停学だってありえる。

　顧こ問もんの先生に相談しても、当然一いつ蹴しゆうされてしまう。ただ……。

「先生！　どうしても夜の学校じゃなきゃだめなんです！」

「いやお前……そんなこと言われてもさあ……」

「先生は夜の学校にワクワクしないんですか!?」

「……しないことはないけどさ……」

「でしょう！」

「いや、だからな……」

「それに！　僕たちホラー映画撮ってるんですよ!?　逆に今まで夜の学校のシーン無しでよくやってたと思いません!?」

オレは出来る限りの詭き弁べんを並べて先生を説得にかかる。

　一緒に来ていたＡ乃エーノ達たちもさすがに無理があると思ったのか。

「Ｅ記イーキ……さすがに先生困っちゃうでしょ……？」

　と諦あきらめムードを漂ただよわせていた。

　しかしそんなオレ達を見て、溜ため息いきを吐ついてから先生は言った。

「だめなものはダメだ」

「え～……そんなあ……」

「…………ただ」

　先生は呟つぶやくように続ける。

「来週宿直なんだよなー……いや～……参った」

「……！」

「よく、タバコ吸った後に、裏門とか裏口の鍵かぎを閉め忘れたりすることあるからな～……」

「え？　え？　先生？」

「見回りもだるいし、正直行き帰りしっかりと危なくないやつらだったら、侵入してきてもわかんないだろうな～……」

「……はい！」

　わざとらし過ぎた。でも、超嬉うれしかった！

「ん？　何が『はい！』だよ、別に独り言を言ってただけだし、これ以上は聞くな、そして話すなよ」

「はい！　はい！」

　やっぱりこの人いい人だわ。

　オレ達はみんなで顔を見合わせると、コクリと頷うなずいてから。

「「「「「ありがとうございます！」」」」」

　と感謝を伝えた。

　先生はしきりに、「いや、なにも出来ないけどすまんな」とわざとらしい演技を続けていた。

　　　＊

　いよいよ撮影当日。

　オレ達たちは放課後、撮影道具などを部室に置くと一いつ旦たん学校から下校し、近くのＤ介デイースケの家に集まった。

　目の前に積まれた大量のお菓子をつまみながら、オレ達はこれか

らの撮影について話合っていた。

「それにしてもさ」

「ん？」

「……夜の学校って、いいよな」

「あんたねえ……」

「いやだって！　夢があるだろ！　なんか行ってみたいけど行った事ないみたいな！」

「確かにね～」

「私も、とっても楽しみです。なんなら様々な学校の怪談について検証したいくらいです、例えば──」

「ああー！　はいはい！　C奈シーナ落ち着いて」

「……落ち着いていますよ？」

「ははは！　で、撮影の順番だけど──」

　そんな風に話し合いをしてから、D介の家で晩ご飯をごちそうになり（ちなみにすごい量だった）、そして夜も更ふけたところで、オレ達は再び学校へと出向いた。

＊

　暗い夜道を歩き、しばらくすると学校に到着する。

　裏門の前に着き、門に手をかけると、それは特に抵抗もなく開いた。

「よっし！」

　そのまま５人で校舎の方へと向かう。

　校舎の裏口の扉も先生の計らい通りに鍵かぎが開いており、オレ達たちは極めてスムーズに学校への侵入に成功した。

　夜の校舎は時計の音も聞こえないほどに静まりかえっていた。

　普段はたくさんの人間がいる空間、そして、普段自分が生活している空間が、夜になるだけで、こんなにも奇妙なものに見えるのだという事を思い知る。

　まるで、夢の中に迷い込んだよう。

　物語の世界が突然始まってしまうかもしれない、そんな期待をするのには十分過ぎるほど、夜の学校というのは異空間だった。

　５人の足音が響き、大勢の人間が歩いているようにも、一人だけで歩いているようにも感じる。

「うおおお～……！　雰囲気あるなあ……！　な！　Ｂ香ビーカ！」

「……あ、うん、そ、そうだね……」

「ん？　どうした？　Ｂ香？　もしかしてビビってる？」

「……そ、そんなこと……ないよ？」

嫌でもテンションがあがるこのシチュエーション。

　オレがＢ香に変なテンションで絡んでいると、後ろからＡ乃エーノに軽く頭を小突かれた。

「ほら、あんまり騒がないの」

「ごめんごめん」

「まったく。ところで、Ｄ介デイースケ、撮影って暗さとか大丈夫そう？」

「ん～たぶん、一回カメラで見てみないとだけど、月の明かりもあるし、非常灯の明かりとかもあるから、結構いい感じになるんじゃないかな？」

「ま、忍び込んでる手前、照明とかあんまり使えないしな～」

「確かにそうですね」

「……あ、そうだ！　先生以外にもたまに警備員とかも見回りに来る事があるって言ってたからさ、先に暗号とか決めとかね？」

「暗号～？」

「そうそう、なんかさ、教室とか入る時とかに、一応確認出来るような」

「ほんっとそういうの好きだよね～……」

「なんだよ～！　ダメなわけ？」

「ダメじゃないけどさ～すぐに思いつくもん？」

「そうですね、言うからにはＥ記イーキさんには候補とかあるんですか？」

「……き、聞きたいな」

　あれ？　そうか、確かに。

　また、決まってない！　って言ったらＡ乃エーノに殴られるんだろうな。

　でも、そうか。

　そうだ、例えばこういうのはどうだろう。

　これならきっと、いつまで経たっても忘れなさそうだし──。

「それじゃあさ──」

　　　＊

　それからしばらくが経ち、少し変なテンションのまま、オレ達たちは部室へと向かう。

　老ろう朽きゅう化かが進む、二階建ての木造建築物。その二階にある、ひとつの部室が、オレ達の目的の場所だった。

　全てが始まった場所、そして……。

「そういえばさ、今、新校舎建ててるじゃん」

「ん～そうだね～」

「新校舎が完成したらさ、こっちの校舎って取り潰つぶされるのかな？」

「どうなんでしょうかね」

「なんか、ちょっと寂しいよね」

「まあ、そしたら映画の設定と一緒で、使われない旧校舎ってことになっちゃうな～」

「…………」

　沈黙の中、階段を昇る足音だけが響き渡る。

　反響が遅れて聞こえてきて、奇妙なリズムを刻み出す。

　コーン。

　コーン。

　コーン。

　まるで催眠術のように、一定のテンポで刻まれる。

　空間も相まって、まだ夢の中のようだ。

　そんな感じでしばらく歩いていると、いつもの見慣れた部室に辿たどり着いた。

　部室の中には、当然の事だが事前に置いた機材がそのままになっている。

「よっし、最終チェックはじめよう！」

さっそくＤ介デイースケがセッティングをはじめ、オレはそれを隣で一緒にチェックする。

Ｄ介も最終的には登場することもあって、今回はオレが観客視点でビデオをまわすという演出になっているのだ。

今までスクリーンの外にあった視聴者の視点が、突如画面とリンクする。

これによって、見ている人が自分自身になってしまったかのような錯覚を覚える、という演出だ。

他のメンバーはそれぞれ、懐中電灯などを使いながら台本のチェックを行っている。

このシーンが終われば、次に何をしよう。

またこの５人で、夢中になれるものをやりたい。

新しいアイデアは、もうたくさんあるんだ。

たとえば「名ナ無ナしの栞シオリ」。

今回『終焉シユウエンノ栞シオリ』の参考になった事件だけど、あの未解決の事件だって、もしかしたらオレ達たちがドキュメンタリー風につくったら面白いのではないか。

それ以外でもなんだって……！

もちろんまだ、編集とか、いろいろやる事は残っている。

でも、なんだろう、文化祭以降、ずっと感じてきた、この感情は。

この物語を、ちゃんと終わらせないといけない。

そのために、今日のこのシーンが必要だ。

そこまで考えて、さっきと同じこと考えていることに気づく。

なんだが、もしかしたらここまでうじうじと拘ってるのはオレだけなんじゃないか、という気がしてくるな。

きっとそんなことはないんだろうけど、でも、少しだけ照れ笑いを浮かべるのだった。

撮影は順調に進んでいた。

これから先は、物語を見ていた視点を、作品の中に登場させるシーンだ。

これまでのナレーションが独白に変わり、カメラが、視点へと変更する。

内容は、こんな感じだ。

*

誰も居ないはずの校舎に足音が響いた。

木造の床がギシギシと不快な音を立てる。

外はもうすっかり暗くなっている。

ポチャンと、どこかの蛇口から、水が滴したたり落ちる音が聞こえた。

そして、風が窓をカタカタと揺らす。

いつもと一緒。

変わらない、何度も見た結末。

Ｄ音デイーネはＢ子ビーコを殺した。

その後にＤ音も死んだ。

そしてＡ弥エーヤはＣ太シータを殺した。

最さい後ごに、Ａ弥はここで自殺する。

誰も残らない。

また今回も、誰も残らない。

これで、今回のパターンも終わり。

ゲームオーバー。

何度やっても同じ。

心のどこかであり得るはずの無いイレギュラーを願った。

この使い古し極ごく々ごくありふれた、つまらないパラレルワールドに逃げた話の「結末」が。

──そうして、『いつも通り』旧校舎の元音楽室の、ドアを開いた…………。

□□!?

　自分の目の前に広がった光景が理解できずにいた。

　旧校舎の元音楽室には、Ａ弥のみならず、死んでいるはずのＢ子やＣ太、Ｄ音までもが揃そろっている。

　いつも学校で集まるように、いつもの制服で、いつも通りに……！

　そして、みんながオレの方を指差していた。

　……これは一体、どういう事だ？

「……ようやく、このゲームの仕組みが分かった」

　Ａ弥が告げる。

「このゲームは、クリア不可能なゲームだったんだ。最初からおかしいとは思ってた、こんな事、あり得ないって」

「僕が解いて上げるよ」

＊

「──はいカットー！」

　カメラを一時停止にして下に降ろす。

　独白のナレーションをしながらの撮影は、いつも以上の緊張感だった。

　でも、でも！

　教室のドアを開けた瞬間の４人がこちらに指を指しているシーン！

　まさにこの感じだというシーンが撮影出来た！

「いやー！　超鳥肌立ったよ！」

「緊張したー」

　Ａ乃エーノがいままで引き締めていた表情を緩める。

「Ｂ香ビーカもホント、バッチリだった！　すっげえ主人公感あった！」

「……あ、う、うん……」

　疲れたのか、顔を下げるＢ香。

「よしっ！　続きのシーンの前に一いつ旦たん確認するから、ちょっと休憩しよう！」

「……うん、あ、じゃあ、ボク……トイレに行ってくる……ね」

「お？　大丈夫か？　一人で平気か？」

「……平気だよぉ……」

Ｂ香はもう、という感じで軽く頬ほおを膨らませた後、教室を出て行った。

去り際に、オレはその背中に向かって「暗号忘れるなよ～」と声を掛けた。

しかし、それからしばらくしても、Ｂ香は帰ってこなかった。

「さすがに遅いよなあ……？」

「確かに……大丈夫かな？」

「心配ですね、警備員さんに見つかったとか？」

「ん～見てこようか～？」

Ｄ介デイースケが懐中電灯を持って立ち上がる。

「ん、そうだな、とりあえず一番近くのトイレだけでも、よろしく～」

「ん～」

そして、教室をガラリと出て行った。

　さすがに迷子ってことはないと思うが、どうしたんだろう？

　まあ、とりあえずはＤ介の帰りを待つか……。

　しかしながら、Ｄ介すらも、帰ってくる気配がなかった。

　もう教室を出てから10分も経たってしまっている。

　最初の頃は普通に話をしていたオレ達たちだったが、さすがにおかしいと気付きはじめる。

「……ねえ、どうしたんだろう？」

「さすがに、遅いですよね……」

　不安な表情を浮かべるＡ乃エーノとＣ奈シーナ。

　確かに遅い、でも、考えられる可能性はそこまで多くない。

「もしかしたら、警備員に捕まったかな……」

「そ、そうかな……」

「うん」

「でも、その時ってどうやったら分かりますかね？」

「そうだな……たぶんだけど、もし不審者が見つかったとかになったら、さすがに宿直の先生のところには報告が行くんじゃないかな？　まして、生徒なんだし……」

「た、たしかに……そうだよね……！」

「一度……宿直室に行ってみる……か？」

　声に出してから、それでも簡単に行かない事を理解する。

　もし、単純に２人して迷子になっているだけだったら？

　もしくは、何か２人して怪け我がでもしてしまったのだとしたら？

　本当に警備員に捕まっていて、宿直室から先生がこちらに向かっている途中だったら？

　いろいろな事を考えるが、ここに誰かが残らないと行けない。

「誰かが……」

「私が、宿直室に行きますよ」

　オレが声を出そうとしたところで、Ｃ奈が言う。

　オレの考えを分かっていたようだ。

　でも……。

「さすがにＣ奈一人で行かせるわけにはいかない……」

「でも、誰かが一人で行かないと、誰かを一人で残す事になりますよ？」

「それは……そうだけど……」

「かといって、女の子２人だけがここに残るのも心細いでしょう？」

「……」

　ちらっとＡ乃エーノを見るが、何か悪い予感でも感じているのか、すでに泣きそうなくらい怯おびえているのだった。

「大丈夫です、私、こういうの慣れていますし」

「でも……！」

「おばけ屋敷」

「へ？」

「私の方が暗くら闇やみを歩くのは得意って、おばけ屋敷でも分かりましたしね？」

　そう言って意地悪そうに笑うＣ奈シーナ。

「……Ｃ奈……」

　たぶん、Ｃ奈も怯えているだろう。

　それはそうだ、もしなんてことのない結末が待っているとしても、こんな状況で一人で夜の校舎をうろつくなんて、ビビらないわけがない。

　それでも、Ｃ奈は人の事を心配できる、そういう子なんだ。

「分かった……もし怖かったら、すぐに帰ってきてくれ。それに、もしなにかあったら、すぐに大きな声で助けを求めてな！　飛んでいくから！」

「ふふふ……了解です」

　Ｃ奈は残っている懐中電灯の一つを持つと、最さい後ごにこちらにニッコリと笑ってから、教室を出て行った。

「……大丈夫」

　オレはそう呟つぶやいたが、それは、たぶんそうあって欲しいという希望だったのだろう。

＊

　また少し時間が経たった。

　この暗くら闇やみの中だ、まださすがにＣ奈シーナは宿直室には着いていないだろうが、少しの時間が果てしなく長く感じる。

　オレとＡ乃エーノは教室の隅に集まって、ほとんど言葉を交かわさずに座っている。

「……なあ」

「……なに？」

「……ごめんな、なんか、オレのせいで巻き込んじゃって」

「……べ、別に……」

「いや、でもさ、きっとみんな大丈夫だって、警備員にこっぴどく怒られてんだって」

「……それはそれで嫌だけど……」

「あ～……確かに、Ａ乃の家って、結構厳しそうだしな～」

「それは……！　関係……ないけど……」

　少しの沈黙。

　そして、それを打ち破る２人の声。

「あのっ！」「なあ」

　ほとんど同時に発せられたその声は、その後に続く言葉をお互いに遮さえぎってしまう。

「な、なに？」

「……そっちこそ……なによ？」

「いや、お前から話せよ」

「……そ、そっちから……どうぞ……！」

　なんか、Ａ乃のやつ、顔が赤い。

　なんだよ。オレまで顔が赤くなるじゃん。

口をパクパクととじ開きする。

あれ？

オレ何を言うつもりだったんだっけ？

たぶん、元気づけようとして、えっとその……。

な、なんでオレがこんなあたふたしなきゃ……！

「……ありがと」

その時、ふと聞こえたＡ乃エーノの呟つぶやき。

オレはその意味が分かって、小声で呟き返す。

「…………おう」

なんだか、不思議な感覚に陥おちいる。

これまで、いろいろな事があったけど、すべては、動き出さないといけないんだ。

モラトリアムは、もう終わる。

そのための、今日の撮影でもあったんだ。

Ａ乃の目を見つめる。

Ａ乃も見つめ返してくる。

その顔は、もう安心して、ほのかな笑みすら感じられた。

今はそれ以上でもそれ以下でもないのだけれど、全てが終わった時、オレは、みんなとどう接しているんだろう。

　ずっと同じところになんていられない。

　ずっと楽しい思い出の中になんていられない。

　もし、それを閉じ込めようとするならば、やはりそれはダメなことだと思う。

　この世界がループでもしない限り、そんなことは不可能なんだから……。

「きゃあああああああああああああああああああああああ！！！！！！！」

　その時、遠くから微かすかに聞こえた悲鳴。

　女性の声。

　あれは、たぶん……

　□□Ｃ奈シーナだ。

　まさか、そんな……！

　安心の反動、揺り返しによって一気に悪い妄想がかき立てられ

る。

　それは、隣に居たＡ乃エーノもそうだったようで、一気に血の気が引いていくのが分かる。

「え？　い、今の声……Ｃ奈……？　え？　え？」

　立ち上がり、体を強こわばらせるＡ乃。

　自分で自分を抱きかかえるようにしている。

「落ち着け……！」

「だって今のって……！　お、落ち着いてなんていられないよ……！」

　突如、懐中電灯を手に取り走りだすＡ乃。

　やばい！　止めないと！

「どこ行くんだよ！」

「電気……！　つけないと……！　外に……！　出ないと……！」

　頭の中が混乱しきっている！

　オレはＡ乃の後を追って教室を出た。

　しかし、教室の出入り口付近に置いてあった機材の袋に足を絡ませてしまう。

「ぐ……！　おい！　Ａ乃エーノ！」

「待ってて！　待ってて！」

　慌てて引っかかった足を抜き、廊下に飛び出る。

　先の方を懐中電灯で照らすも、そこにはすでにＡ乃の姿は無かった。

「くそ……！」

　どうする？

　どうする？

　先ほどのＣ奈シーナの叫び声からして、すでに何かが起きているのは事実だ……！

　Ａ乃を追いかけるべきか……！

　それとも、宿直室に向かうべきか……！

　外に助けを呼びにいくべきか……！

　どうしたらいい!?

「……っ！」

　突然の頭痛に頭を押さえる。

思考停止状態のオレの脳内に

いつか見た夢がフラッシュバックする。

忘れたはずの

あの時の

最悪の結末が

今更になって思い出される。

「ああああああああ……!!」

――最初は手首が落ちていた。

「＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊」

「……っ！」

　頭痛がおさまり、顔を上げる。

　一瞬、そうか、これは夢の続きか、と思うがすぐに違うと理解する。

　あの夢の中では、夕暮れだったじゃないか。

　それが、今では月が出ている。

　そして、どうしても、どうしても最さい後ごのセリフが思い出せない。

　あの時感じた違和感が、なんだったのか、それが分かれば……！

　とにかく、とにかくと目的地も設定せずに歩きだす。

　フラフラと。

　まるで夢遊病患者のように。

　落ち着け、落ち着くんだ。

　夢と現実は違う。

　オレは今、あまりにも大きな恐怖で、妄想に飲み込まれているだけだ。

　さっきの悲鳴は本当にＣ奈シーナのものなのか？

もしかしたらみんなのドッキリかもしれない。

　ひとりひとりいなくなって、そして、驚かそうとしているのかもしれない。

　まったく、たちが悪いったらない。

　みんな、演技も相当うまいしな。

　それは、オレが知ってる。

　監督だし。

　そういえば、映画。

　映画を撮ってたんだった。

　こんな迫真の演技ないだろ。

　みんなもそうだけど、オレもだ。

　今のオレを撮影したら、アカデミー賞どころじゃない。

　だって、本当に、本当にビビってるからな。

　そうだ、と思いビデオカメラを掲かかげる。

　教室から出る時、懐中電灯と一緒になぜか持ってきたカメラ。

　録画ボタンを押すと、緑のボタンが赤に変わる。

　ほんの小さなボタンの明かりが、廊下全体を赤く染めたような気がした。

「Ｂ香ビーカ～」

　声を出しながら、廊下を進む。

「Ａ乃エーノ～いいかげんにしろよ～」

　なんだか笑えてくる。

「Ｄ介デイースケ～どこだ～」

　そうだよ、こんな、馬鹿げたこと。

「Ｃ奈シーナ～知ってるだろ～？　オレがびびりだって～」

　やめてくれよ。

　お願いだから、もう、やめてくれ。

　にへらと笑っていた顔が歪ゆがみ、涙が流れそうになる。

「たのむ……から……」

　体の奥から震えるような感覚。

　心臓を紙ヤスリで削られ、

脊せき髄ずいに氷を突っ込まれ、

　脇腹をナイフでなぞられたような、

　嫌な、厭いやな、そんな感触。

「……………………」

　ついに言葉も出せなくなる。

　それでも、ゆっくり、ゆっくりと歩いて行く。

　しばらくして、階段の踊り場に差し掛かった。

　―カタッ。

　背後から音がした気がした。

　振り返ると、いつの間にか遠くなった教室から、明かりが漏れていた。

　もしかして、誰か戻ってきたのか？

　とにかく、戻らないと！

　オレは暗くら闇やみの中、カメラの録画ボタンを消すのも忘れて走る。

先ほどみたいに転けないように、少し先を照らしながら。

Ａ乃エーノ、Ｂ香ビーカ、Ｃ奈シーナ、Ｄ介デイースケ。

まったく、心配させやがって！

もしかして警備員も一緒かもな。

そうなると、先生もいるかも。

やばいな、責任取らされちゃうかもな。

その場合は、オレが部長だし、監督だし、オレが悪いんですって言おう。

でもな、みんないい奴やつばっかりだし、先生もいい人だから、かばわれちゃうかもな。

でも、みんなの事守らないとな。

……みんなの顔を見たら、泣いてしまうかもしれない。

なんだろう、とにかく、早く、早く、みんなの顔が見たかった。

教室の前に立ち、いつものように、ドアを空ける。

「みんな……！」

—ヌチャ。

最初に感じたのは、足元から伝わる、ぬるっとした感触。

感覚だけで、鳥肌が立つ。

　靴越しなのに、生暖かな温度が伝わるようだ。

　鼻び腔こうの奥を撫でる、甘ったるい匂におい。

　全身が警告を鳴らす。

　よく見えない足下から、教室全体へと視線を上げる。

　━月明かりが、教室の中を照らしていた。

　まず目に入って来たのは、オレを指差す、４人の手。

　まるで、撮影していた映画のラストシーンのようだ。

　それでも、明らかな相違点があった。

　━全員が、バラバラにされた死体だったのだ。

「…………？」

　オレは、目の前に広がっている光景が理解出来ない。

　いつものように、いつも通りの所定の席に置かれた、血まみれの死体。

　Ａ乃エーノの席には、首から下の体が椅子に座らせられ、こちらを指差す。

Ｂ香ビーカの席には、片足と腕だけが置かれ、こちらを指差す。

Ｃ奈シーナの席には、上半身だけが椅子に置かれ、こちらを指差す。

Ｄ介デイースケの席には、頭と腕が机に置かれ、こちらを指差す。

そこにあるのは、

ただの肉塊。

手首。

足。

頭部。

上半身。

首無し。

すべて、夢の通りだ。

夢の世界が現実に染しみ出てしまったのだ。

見覚えのある人間の……。

少し前まで、一緒に話していたみんなの。

糸の切れた操り人形のような気持悪さ。

オレは一人一人の死体の近くへと近寄っていく。

Ｄ介デイースケの顔を触り、髪を撫でる。

Ａ乃エーノの肩を持ち、少し揺さぶる。

Ｃ奈シーナの頬ほおを撫で、手を握る。

Ｂ香ビーカの足を触り、指に触れる。

みんな、みんな、まだ生暖かい感触がある。

それでも、もう確実に元には戻らないことを、ようやく理解する。

「うっ……！」

思い出したかのように胃の中の物が込みあがってくる。

胃液の酸すっぱさが口内に浸食してくる。

オレは耐えきれずにしゃがみ込み、全て嘔おう吐とする。

「うええええ……！」

モノクロの世界が、カラフルに変わり、網膜の奥に焼き付く。

まるで、二度と忘れることがないように、脳に直接、焼印を押されているかのようだ。

夢で、夢であってくれ。

オレは口元を拭ぬぐうと、祈るような気持ちで顔を上げる。

しかし、何も変わらない。

絶対的な絶望感。

圧倒的な現実感。

変わり果てた姿を見て、思い起こすのはなぜだか楽しかった思い出ばかり。

Ｄ介デイースケとの、フードバトル。

Ａ乃エーノとの、ゲーム。

Ｃ奈シーナとの、おばけ屋敷。

Ｂ香ビーカとの、飴あめ細工。

「……なん……で……」

　声に鳴らない声を出す。

　そこからどうしても動くことが出来ない。

　何度も立ち上がろうとするが、立つ事すら出来ない。

　オレの糸も、すでに切れてしまっていたのだろう。

　次し第だいに現実と夢……何度もどちらがどちらか分からなくなる。

　だからだろうか、オレは、後ろから近づく「それ」に、今度は気が付いたのだが、それが夢の事なのか、現実なのか、理解することが出来なかった。

だって、おかしいじゃないか。

そんなことが、あるわけがない。

―カタッ。

「……ッ！」

ゴッ！

次の瞬間、トラックに跳ねられたような衝撃を感じる。

オレはそのまま倒れ込むと、

その、

見覚えのあるシルエットから、

予想もつかないようなセリフを聞いた……。

「Ｅ記イーキは夢の結末が担当だって、言ったよね？」

＊

その日から、オレは繰り返しずっと夢を見ている。

この、消毒液の匂においのする部屋で。

命と等価の線に繋つながれ。

どちらが現実で、どちらが夢で、そしてどちらが虚構かなんて……そんなことはどうでもいい。

あるのはただ、幸せな日々。

存在していたはずの、ＩＦの世界。

嘘うそつきな少年は、悪夢にうなされる。

それでも、それは、幸せな夢だ。

たとえバッドエンドが決まっていたとしても……。

いや、バッドエンドが決まっているからこそ……。

だってそうだろ？

簡単な連立方程式でしかない。

バッドエンドを引き立てたかったら……、

—直前を、うんと幸せにすればいい。

CHAPTER3 拝啓、舞台裏より

「……はい、ということで」

「ということでって何よ？」

「……さぁ？」

「Ａ弥エーヤは相変わらずだなあ」

「怒るＢ子ビーコちゃんも相変わらず素敵です」

「もう……！　Ｄ音デイーネもＣ太シータも茶ちゃ化かさないでよ」

「で、一体これはどういう状態なのかな？」

「……うーん、どういうことなんだろうね？」

「舞台挨あい拶さつって聞いてるけどね」

「舞台挨拶？」

「ということは、本編とは関係ないということですかね？」

「……さあ、どうなんだろうね？」

「何にも分からないってこと？」

「……だから、よく分からないんだって」

「そっかー」

「メタ的でネタ的な会話をしても大丈夫ってことだね」

「メタ……的？　なに？」

「んーたとえば、今回までの話について、とか？」

「え？　そういうのありなわけ？」

「……まあ、ありだろうね」

「舞台挨拶っていうか、舞台裏だね、完全に」

「はあ……まあ、別にいいけど。でもそうなると、何が分かるわけ？」

「……わからないね」

「あんったねえ」

「しょうがないよ」

「でも、これでカードは出尽くしたという感じがしませんか？」

「確かにね、もう、これ以上はお手上げーって感じがするけど」

「……とはいえ、何も解決していないし」

「そうだね、むしろ謎が深まっちゃったって、感じだね」

「じゃあどうするのよ？」

「……さぁ？」

「だから、さぁじゃないわよ！」

「……しょうがないじゃないか、分からないものは分からないんだから」

「そうだねぇ」

「そうですね」

「えー……じゃあ、これまでのことは無駄だったって、そういうこと？」

「……そうとも限らない」

「？」

「どういうこと？　Ａ弥エーヤ」

「確かに分からないことだらけだけれど、分かったこともある」

「え？」

「じゃあ一度ここでおさらいをしてみようか」

「お、いいね」

「僕らは４人で、彼らは５人だった、つまり犯人を合わせると、それぞれ何人の登場人物が必要だろうか？」

「そんなの、５人と６人じゃない」

「……フッ」

「ちょっと！　なに鼻で笑ってんのよ！」

「ん～怒ってるＢ子ビーコちゃんもかわいいんですが、ちょっと浅い考えかなあという気がしますねー」

「Ｄ音デイーネまで……じゃあどうだっていうの？」

「答えはこう、『最低人数以外は特定出来ない』」

「はあ？」

「まず犯人がいるから一人プラスする、これはあまりにもよろしくない。だって、どこにも単独犯だって決められる要素はなかったんだから」

「……う、確かに……」

「それに、内部の犯行という可能性もある」

「でもそれは！　リヴァイバル編で違うって結論が出たんじゃないの？」

「役割としての４人は否定された、けど、一人二役だとまた話は違うかもしれない」

「……はあ？」

「キツネも、この中に一人だしね」

「……どういうこと？」

「意味なんかないよ」

「……なんか、騙されているような気分」

「確かにそうですね」

「でも、例えばさ、箱から取り出したパズルをすべてはめ終わって、それでもまだ抜けがあるとしたら、それはどういう事だと思う？」

「そんなの……ありえないでしょう？」

「そう、ありえない。つまり、これは出来損ないなりに正しい終わり方で完結しているか、何かしら欠落したピースがあった。そう考えるのが自然だ」

「つまり……どんなに頑張っても完成しないってこと？」

「そういうことだね」

「そんなの、欠けつ陥かん品ひんじゃない」

「そうだね。しかも、組み上がってみないとわからないし、まして、組み上がってみてもわらかないかもしれない」

「ひどい話だね」

「うん、まったくもってひどい話だよ」

「……」

「……」

「……」

「……………で？」

「ん？」

「いや！　ん？　じゃないでしょ！　結局、これってなんだったのよ！」

「……だから、分からないって」

「はぁ？　結論すらでないってこと？」

「うん」

「ホ、ホントに……？」

「うーん、そもそも誰の視点なのかも分かっていないモノに無理矢理にでもポジティブな結論を出そうとするなら」

「するなら……なんでしょう？」

「リヴァイバル編までは同じ世界の架空舞台だった。つまり、この舞台裏を覗いている『誰かさん』は今まで作られた記録や記憶、物語を見せられていた。だけど、もしも、ここから舞台に用意されてないはずの欠落したもう一つのピースが現れたとしたら、物語はもう一歩だけ先に進むかもしれないね」

「それって、何が現実か分からないってこと？」

「一概にそうとは言えないよ。現実は現実。共通の証言があれば真実とわかるさ」

「共通というのは私たちの中でですか？　それなら……」

「いや、Ａ弥の言う共通っていうのはいくつかの世界での話でしょ？　例えば彼ら５人と……ね」

「ふーん。まあ、よく分からないけど変われるならそうなることを祈るわ」

「うふふ……理解力の無いＢ子ちゃんと一緒なら私はこのままでも構いませんけど」

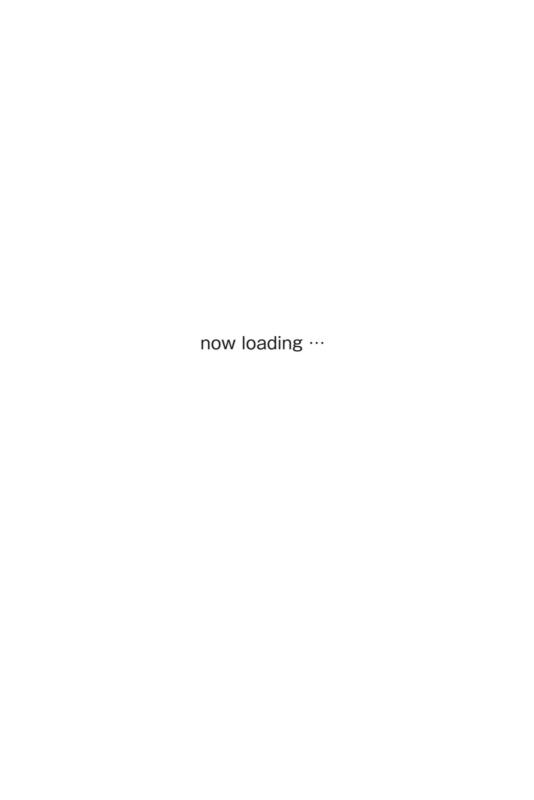
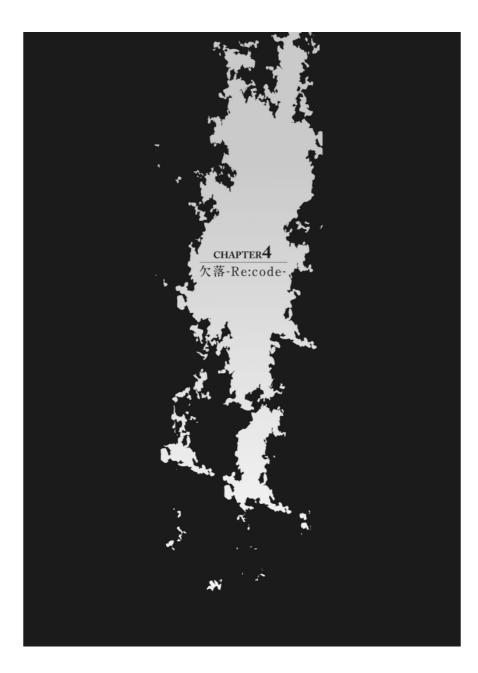
「とはいえ、前に進まないわけにはいかない」

「そうね」

「それなら、賭けてみよう」

「賭ける？」

「うん」

「──欠落した、最さい後ごの１ピースにでもさ」

CHAPTER4
欠落-Re:code-

すり切れる寸前のテープが、カタカタと音をたてて回っている。

「──ねえ、今日もみんなに近づいているよ」

「ようＡ弥エーヤ！」

　背後から僕の名前を呼ぶ声が聴こえる。

　高く澄んで、良く通る声だ。

　向きかえるとクラスメイトがこちらに向かって小走りで寄ってきているところだった。

「相変わらず、今日も不機嫌そうだね」

　常に元気のいいこいつはクラスでも人気者だ。

　僕なんかに構うのではなく、こいつはみんなに構うやつなんだ。

　毎日楽しそうに生活をしているこいつのことが、僕は正直嫌いだった。

「大きなお世話だよ」

　ぶっきらぼうに返事をする僕に、「相変わらずつれないな」と笑いながら話を続けた。

「──そういえばお前さ、噂うわさ話ばなしとか詳しかったよな」

　来た……僕の表情が一瞬だけ緩みそうになる。

　僕は人のあらぬ噂を作り、流す事が好きだ。

　そして、自慢ではないが、それはとても狡猾に行われるため、ほ

とんどの人が僕が噂を流してる張本人だとは気が付かず、このように僕に聞いてくるのだ。

　昨日はちょうど、Ｂ子ビーコの噂を流したばかりだった、彼は普段からＢ子には興味があるようだし、おそらくはその件だろう。

　僕は悟られないよう、表情を戻すと、彼に聞き返した。

「ん？　何かあった？」

　僕が興味を示したことがうれしかったのか、彼は嬉うれしそうに話し始めた。

「実はさ、今日別のクラスに転校生が来るらしいんだけど何か知ってるかなって！」

「……！」

　……転校生？

　おかしいな……。

「……いや、残念ながら情報は入ってないな」

「あーそっかー！　いや、女子か男子かも知らないんだけどさ、もし女子だったら、美少女だったらいいなあって」

「……そうだね」

「お、なんだよー！　Ａ弥エーヤもそういうの好きなわけ？　このムッツリがー！」

「やだな、そういうのじゃないよ」

　クラスメイトと離れてからしばらくの間考える。

　しかし、転校生か。

　まあ、それなら確かにＢ子ビーコの噂うわさよりも優先される可能性がある。

　でも、こんな時期に転校生だなんて。

　僕は胸の奥にしこりのような違和感を感じたが、考えたところで何かわかるわけでもないので、すぐに教室へと向かって歩き始めた。

　しかし、そこで、視線を感じる。

　最近いつも感じるような、その視線と少し似ている。

　僕は視線を感じた方を振り返った。

　そこには、一人の生徒が立っていた。

　もちろん全ての生徒を見た事がある訳ではないが、初めて見たという感覚を覚える。

　彼は無言でこちらに近づいて来た。

　僕に用でもあるのか……？

「……どうかしたかな？」

彼はすぐ近くまでやってくる。

　ちょうど進行方向を塞ぐような形になっているため、声を掛けてしまう。

　そして、無言のまま、僕の顔を見ていた。

　Ｃ太シータよりも少し長めの髪に髪留めをつけ、後ろで一部縛っている。

　制服のブレザーの下にパーカーを着て、ラフな雰囲気だ。

　おかしなやつだなと訝いぶかしみ、無言でいることに耐えられなくなってきた。

　用がないなら……と無視してそのまま通り過ぎようとするが、その時、ちょうど声が聞こえてきた。

「……終焉シユウエンノ栞シオリ」

「！」

　僕は思わず動揺してしまう。

　それは、今僕にとって一番関心のある言葉だったからだ。

「終焉ノ栞について、調べてるんだろ？」

　目の前の彼は続けた。

「……君は……？」

＊

　放課後、クラスメイトたちが部活だのなんだのに向かう中、僕は帰宅するでもなく、人の少ない方、少ない方へと歩いていた。

　一階の渡り廊下から、裏庭を抜け、少し外れたところに旧校舎がある。

　老ろう朽きゅう化かが進み、今はほとんど使われていない二階建ての木造建築物。

　その二階にある、元音楽室の扉を開くと、そこにはすでに普段と変わらぬ顔が揃そろっていた。

「……やあ」

　僕は何食わぬそぶりで机の一つに荷物を置いた。

　この机が、僕のいつもの所定の位置だった。

「やあじゃないわよ……って……」

　こちらを振り返ったのは、学校でもトップクラスの美少女であるＢ子ビーコ。

　普段は清せい楚そでおとなしくて、誰にでも人当りがいい彼女だが、実のところそれは人前で見せる仮面。実際のところは、裏表の激しい性格だ。

　大きな噂うわさにはならなかったとはいえ、多少は広まっていた噂について怒ろうとでも思ったのだろう、しかし、僕の隣にいる人物をみて、言葉を飲み込んだ。

「……だ、誰？」

「……さあ」

「あ、あんたが連れてきたんじゃないの？」

「どうなんですか？　Ａ弥エーヤさん」

　僕に質問を投げかけてきたのは、長めの髪に、細見の身体。どちらかというと、僕と同じで「根暗」そうな印象を受ける少女。

　──彼女の名前はＤ音デイーネ。

　彼女も、いつもの面子の一人だ。

「なんとも言えない……かな」

「Ａ弥、どういうこと？」

　ニコニコとした表情で僕のことを眺めていたＣ太シータが、話に割り込んでくる。

　色素が薄くやわらかそうな猫毛に、人の良さそうな垂れ目。

　おそらく「イケメン」の部類に入るであろう彼は、僕の幼おさな馴な染じみだ。

　なぜだが今は珍しく、少し怒っているような雰囲気がする。

「彼の方から勝手についてきた、という方が正しいかな」

「勝手にって……」

「彼はどうやら、『終焉シユウエンノ栞シオリ』について、何か知ってるようなんだ」

「……」

「……」

「……」

「……」

　長い沈黙。それぞれがいろいろな事を考えているのか、何ともいえない表情をしている。これは、『終焉シユウエンノ栞シオリ』という言葉が僕らにとって、今一番の話題であることと、その噂うわさの特異性からくるものだった。

　――『終焉ノ栞』

　この話は、どちらかというと学校の怪談に分類される話かもしれない。どのサイトなどで調べても出てくることがない、この学校にだけ伝わる……本当の噂うわさ話ばなし。

　噂によると、この学校のどこかに『終焉オワリノ本ホン』と『終焉ノ栞』というものが隠されているらしい。その本にはこの世の中のありとあらゆる噂話が記載されており、栞しおりの挟まっているページを開くと、その噂が現実のものになってしまうというのだ。

　噂だけ聞くとなんて事はない。しかし、僕達たちにとってこの噂が他の噂とは違い、重要なことには理由があった。

—どうやら、この本と栞は存在するらしい。

ちょうど十年程前、この旧校舎が実質的に使われなくなったその年、この学校で不可解な連続殺人が起こっている。

これは、この学校のどの生徒も一度は耳にしたことがある有名な話である。

なぜそんな前の事件について、ほとんどの生徒が知っているかというと、それはもちろん事件がまるで怪談のような形で語かたり継つがれているからである。

—十年前のあの事件も……彼らが『終焉ノ栞』を手に入れたからだ。

そんな風に、終焉ノ栞の噂話は、十年前の事件と共に語られる事が多い。

そして、僕らの活動のひとつの目標は、『終焉シユウエンノ栞シオリ』の謎を解き明かすことだった。

もちろん、最初はただの都市伝説のひとつくらいには思っていた。

だが、僕らにとって、それが重要になったのには、理由があった。

つい一週間ほどまえ、ひとつのノートを旧校舎で見つけることになる。それは、かつて旧校舎を使っていた生徒による、交換日記のようだった。

みんなでそれを読み進めていくうちに、ある事実に気がつくこと

になる。

　──これは、十年前に死んだ彼らの交換日記だ。

　日記には、『終焉ノ栞』と『終焉オワリノ本ホン』を手にするための儀式の方法が書いており、彼ら４人はそれを行い死んだ……。

　しかし、日記から得られる情報は以上。

　やはりこれよりも先は、リスクはあるかもしれないが、『終焉ノ栞』を手にするための儀式を行う必要があるというのが、僕の結論だった。

　果たして、彼は何か別の情報を持っているのだろうか。

　それとも……。

　全員が彼に注目する中、ゆっくりと口を開いた。

「よければみんな、オレについて来て欲しい……」

「ついて行く……？」

「一体どこへですか？」

「──病院だ」

僕たち４人はそれぞれ目を合わせると、コクリと頷うなずいて、彼の方を向いた。

　彼もひとりひとりの目を覗のぞき込こむと、ただ無言でコクリと頷いた。

CHAPTER5
病室1713号

学校からそう遠くない総合病院。

　その中でもかなり上の方の階の個室の前に５人は居た。

　うるさかった受付とは打って変わって、辺りは静まり返っている。

　彼は個室のドアを開け、中に入る。

　消毒液の匂においが鼻をつく。

　体中に何かの点滴を繋つながれた人が、ベッドに寝転がっていた。

　意識がないのか、それとも寝ているだけなのか、ベッドの上の人物は僕らが入ってきたことに関して、特に反応を示さなかった。

　点滴の先に繋がれた機械から、定期的な電子音が聞こえる。

　部屋の中を見渡すと、定期的に彼か、もしくは親族でも来ているのだろう、まだ新しい生花が飾ってあった。

　その花の匂いだろうか、消毒液に混ざって、甘い匂いがする。

「……この匂い……」

　Ｂ子ビーコが匂いを嗅かぎながらなにか考えている。

「……どうかした？」

「あ、ううん？　大丈夫、それより……この人は？」

　目の前の男性を見ながら、僕らを連れてきた彼が口を開いた。

「……十年前の事件」

「？」

「調べていけば、分かることだけど、あの事件は、伝わっている都市伝説と事実とで微妙なズレがある」

「……ズレ？」

「そう、学校で伝わっているのは、十年前の生徒、全員の死亡……だろ？」

「……噂うわさでは……ね。僕らはまだ調べてない」

「でもそれは違う」

「どういうこと？」

「全員が死んだわけじゃない」

「！」

「つまり……この方が……４人の生徒の内の……１人だということですか？」

「それも違う」

「え？」

「……君たちが手にしたのは、交換日記か何か？」

「……なんでそれを」

「４人なんて、噂うわさでは語られてないだろ？」

「……確かに」

「でも、その交換日記は事実とは違う……」

「……どういう……こと？」

「本当は、十年前の事件に巻き込まれたのは……５人だったんだ」

「……！」

そう言って、彼はベッドに寝る男性の顔を覗のぞき込こむ。

　男性は反応が無い。

「彼は、その全てを良く知っている人物だ」

　まさか、まさかそんな。

　彼は、もしかして……。

「……十年前の、被害者の一人？」

　僕は彼の目を見て問いかける。

　彼はフッと笑うと、大げさなジェスチャーを交えて返答した。

「──それどころか、彼こそが『終焉シユウエンノ栞シオリ』を作った人物だよ」

「……」

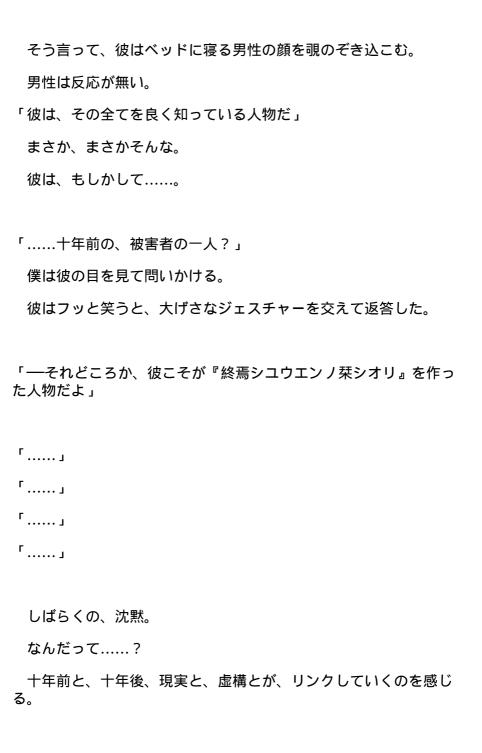
「……」

「……」

「……」

　しばらくの、沈黙。

　なんだって……？

　十年前と、十年後、現実と、虚構とが、リンクしていくのを感じる。

「……君は……君は、一体……？」

「オレの名前は──」

物語の始まり。開ける幕。

窓の外は曇り空。まだ夏も始まっていないこの季節。囁ささやかれるひとつの噂うわさ話ばなしがあった。

詳しくは誰も知らない。いや、誰も知ってはいけなかった。

ただ空っぽの本と猫の栞しおりを見つけても、決して触れてはいけないとだけ言われていた。

──それが終焉シユウエンノ栞シオリ。

みんな、期待している言葉を最さい後ごに掛けよう。

もう、エンディングは近づいている。

「──さぁ、もう一度やろうよ」

あとがき

　どうも、スズムです。

　一年はあっと言う間ですね。なんだか歳としと共に時間の駆ける足音が大きく早くなって来たような気がします。

　そんな風にして「終焉シユウエンノ栞シオリ」もついに四巻目。これを手に取ってくださったほとんどの方とは四度目ましてですね。

　僕もいつの間にか少年とは呼ばれない歳になってしまいました。少し前まで静岡の片田舎を自転車で走り回って居たのになぁなんて思ったり、尚なお更さら時の流れを感じざるを得ません。

　さてさて、いつも入稿手前のテンションのままおかしなことを書き続けていますが、今回は真面目まじめに「終焉ノ栞」の舞台について少しだけ触れて行きたいと思います。

　何を隠そうＡ弥エーヤ達たちの住む街の多くは僕の育ち、走り回った故郷がモデルとなっています。

　いつも集まるあの音楽室も自分が慣れ親しんだ母校のモノを思い浮かべて執筆しておりました。

　しかしながら人間の記憶は案外頼りなく、コミックを担当していただいている「結ゆう城きあみの先生」からいただく質問にお答えしている途中で「あれはどうだったかな？」「位置は南だよな……？」と自分の中の学校が揺らいでいることに気がつきました。

　編集さんとも相談し、こいつぁあかん！　と、ビクビクしながらも高校時代お世話になった先生に連絡して取材もとい、写真撮影の許可をいただけたので関係者数人でワイワイお邪魔してきました。

ドッペルゲンガーが発見される駅最も寄よりのコンビニから始まり、二巻でＣ太シータとＤ音デイーネが遭そう遇ぐうする神社、色々な場面で登場し多くの転機をもたらす図書館、ショッピングモール、おまけに作中には出てきていない僕が学校帰りに友達と寄っていたコンビニまで足を棒にして周りました。地元が大好きなスズムは終始大はしゃぎ、よく分からん土地に連れてこられて意味不明な場所の写真を撮らされる１５０Ｐさんは最後ぐったりしていました。どんまい。

　その後、自分がペタペタと地図に写真とシーンを貼付けて作った「終焉マップ」がこの間ＰＣを整理している途中で出てきて、取材に行くだけ行って関係者に渡し忘れていたことに気がついたことはまだまだ内ない緒しよにしておきたいと思います。

　みんな！　リプライなんてするなよ！　お兄さんとの約束だぞ！

　この作品を無事に完結させて、チーム全員ではしゃぎながらモデル地を巡礼するのが自分の密ひそかな目標です。楽しみっ！

　余談となりますが、前のあらすじに出てきた姉と僕は約十歳ほど歳が離れています。更に言うと出身高校も同じです。

　それだけでお気づきになる方もいらっしゃるかもしれませんが、Ｅ記イーキ達たちの活躍する十年前の学校とは、まさに姉が通っていた頃の母校です。

　当時小学生だった僕は、弟というだけでちやほやされることを知った上で、姉の居る文化祭に遊びに行きました。案の定ちやほやされながら出店を周りとっても楽しい時間を過ごしました。そして、その日見て感じた光景が「ぼくたちデイズ」の元となっているのは間違いありません。

　幼い僕には兄ちゃん姉ちゃんが頑張って作ったお祭りがキラキラと光って見え、いつまでも忘れられないくらい楽しいものだったので今までの終しゆう焉えんに無い明るい雰囲気になったのかもしれませんね。

文字数に限りもあるので今回はこの辺で終わりとなりますが、またいつかこんな制作秘話をみなさんにお伝えできたらなあと思います。

　最後に。

　今巻で多くの謎が照らされたかのように思っている方もいらっしゃると思いますが、それはどうでしょうか？

　へそ曲がりな世界はまるで謎に迫るかのように見せかけてキツネと犯人から遠ざかっています。

　もしかしたらズル賢いキツネは、犯人を盾たてにして隠れるつもりなのかもしれません。

　それを解こうとするのか、物語に身を任せるのかは貴方あなたの自由ですが、恐こわがりな僕だったらきっと——。

　それでは、『終焉シユウエンノ栞シオリ伍ご～結末ユメロディ～』でお会いしましょう。

　それまでどうか、お元気で。

終焉ノ栞も
とうとう4巻
という事で
今回も
表紙と
口絵を
描かせて
頂きました。
最近10年前の子達
ばかり描いていたので
夏っぽいB子ちゃんをぺたり。
あとがき。
Sane

終焉ノ栞
小説4巻
発売おめでとうございます!!
結城あみの

終焉ノ栞
4巻発売おめでとうございます。
横槍メンゴ

著者

スズム

　映画研究会に所属するＥ記達は無事に自主制作映画の公開に成功し、文化祭の残り一日を思い思いに楽しんでいた。

イラストレーター

さいね

　そして学園祭も終わり、再度映画撮影を始めた彼ら。

イラストレーター

こみね

　もう一つの結末を撮影するため、夜の学校に忍び込んだのだが、現実と虚構とをバラバラに切り裂く悲鳴が鳴り響く。

主犯

（１５０Ｐ）（わんはーふぴー）

　10年止まない旋律は一つ欠落し、五重奏から再び四重奏へ―。

カバー・口絵・本文イラスト／さいね・こみね

主犯／１５０Ｐ

装丁／團夢見

終シユウ焉エン ノ栞シオリ 詩シ

欠落ロスト-Re:code-

スズム

2014年7月31日　発行

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

ＭＦ文庫Ｊ『終焉ノ栞 詩　欠落-Re:code-』

2014年7月25日初版第一刷発行

発行者　三坂泰二

発行　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ

https://www.kadokawa.co.jp/

メディアファクトリー　カスタマーサポート

［WEB］https://www.kadokawa.co.jp/

（「お問い合わせ」へお進みください）